

伊能忠敬研究

史料と伊能図

一〇一七年 第八十三号

伊能忠敬研究会

伊能忠敬研究会

一〇一七年 第八十九号

史料と伊能図 「伊能忠敬研究」



THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.83 2017

国立国会図書館蔵

伊能大図 九十号部分 武藏 相模

第八十一号の表紙で紹介した伊能大図90号の図の西側である。

この地域は、東京の西部で多摩と呼ばれる。

図の東西と南北に一本の測線が見える。東西の測線は甲州街道で、西の端が相模と武藏野国境にあたる小仏峠である。測量隊は九州の第七次測量の帰路に甲州街道を西から江戸に向かって測量しており、小仏の峠を越えたのは文化八年(1811)五月四日である。

翌五月五日は、本隊が甲州街道を小仏駅から八王子宿まで測量し、支隊は高尾山を測量している。

高尾山へは小仏関所の西側の新井村から登っているが、現在はこの付近に登山道は存在しない。しかし、同時代に描かれた武藏名所図絵の小仏関所の絵には関所の西側から高尾山の登山道が描かれているから、当時は甲州街道から高尾山に詣でる人の登山口があつたのであろう。

五月六日の本隊は八王子宿から府中番場宿まで測量しているが、この日も支隊は日野宿で分かれ多摩川の南側を高幡村から一ノ宮村まで測量している。

その後、高井戸、内藤新宿と甲州街道沿いに測量を続け、五月九日に深川黒江町に戻った。

一方、南北の測線は、第九次測量によるものだが、忠敬はこの測量には参加しておらず、弟子たちの手によつて行われた。

第九次の測量は伊豆諸島であったが、この測量の帰りに、伊豆下田から熱海、箱根を通り、平塚から厚木に出て現在の国道16号沿いに北に向かい、八王子から日光街道を通り川越を熊谷から荒川沿いに南下し、文化十三年(1816)四月十二日に江戸亀島町に戻つている。

この付近は、江戸時代天領だったことから、知行所の記入が多くみられ、同時代に編纂している。

された新編武藏風土記稿の記載とよく一致している。
(菱山剛秀)
(表紙題字は伊能忠敬の筆跡)

表紙解説

目次

83号

研究と話題

● シーボルトから没収した『カラフト島図』
—伊能図の筆跡との比較—
(前田幸子)

● 『奥州紀行を読む』
(菱山剛秀)

● 『伊能忠敬周辺の人⑧佐藤一斎』
(前田幸子)

● 『加賀藩十村役の手代たちが見た伊能隊』
—「新田家文書」より—
(河崎倫代)

● 『伊能忠敬の足跡をたどる』連載第十八回
(前田幸子)

● 『伊能忠敬測量隊の足跡をたどる』連載第十八回
(前田幸子)

● 『伊能忠敬周辺の人⑧佐藤一斎』
(前田幸子)

資料

● 『伊能忠敬測量隊の足跡をたどる』連載第十八回
監修 渡辺一郎
編著 井上辰男

● 『伊能忠敬周辺の人⑧佐藤一斎』
(前田幸子)

● 『伊能忠敬周辺の人⑧佐藤一斎』
(前田幸子)

忠敬談話室

● 『伊能忠敬が宿とした盛田久左衛門家』
(柏木隆雄)

● 『篠山市標柱』
(加賀尾宏一)

● 『忠敬が宿とした盛田久左衛門家』
(徳平利加子)

● 『測量日記にみる一日の測量』
(菱山剛秀)

● 『伊能忠敬の足跡をたどる』連載第十八回
監修 渡辺一郎
編著 井上辰男

お知らせ・新入会員自己紹介

忠敬没後二百年記念行事の進捗について
(渡辺一郎)

新入会員自己紹介

56

53

50

48 47

34

21 14

6 1

シーホルトから没収した『カラフト島図』—伊能図の筆跡との比較—

前田幸子

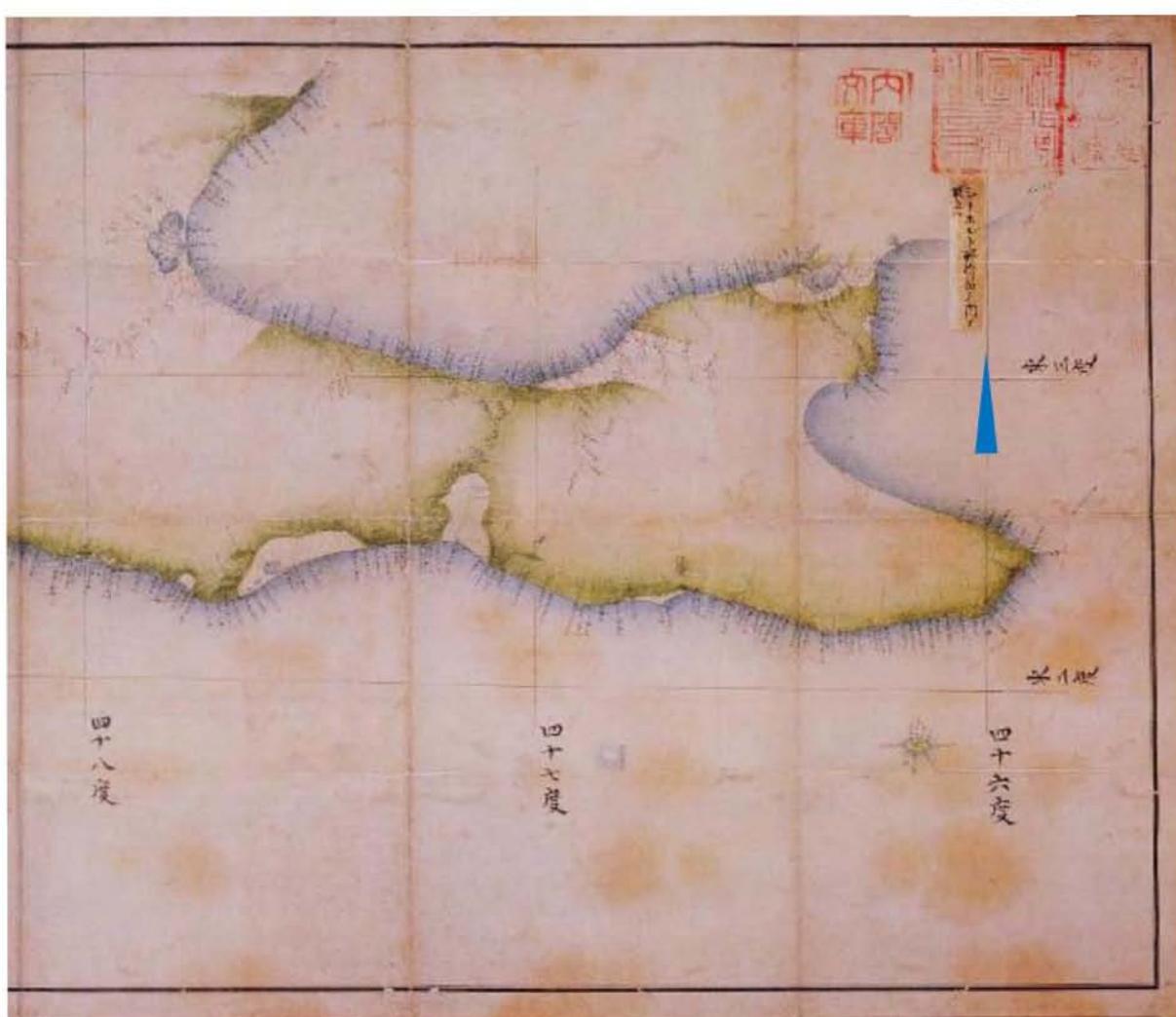


「シーホルト所持品之内 取上候」

(左が北)



(拡大図)



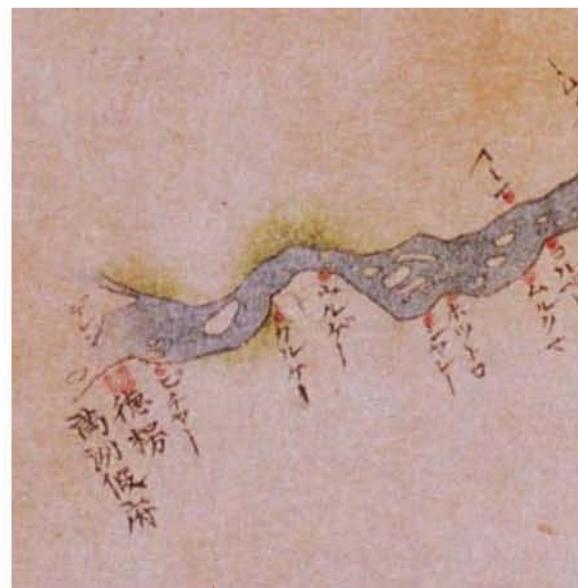
国立公文書館に『カラフト島図』と標題がついた地図が収蔵されている。「シーホルト所持品之内 取上候」という付箋が貼られ、文政十二年（一八一九）にシーホルトが国外追放処分をうけた時に没収された地図として知られている。彩色された海岸線に沿つて地名がびっしりと書き込まれた一三一×五七cmの小図である。間宮林蔵のカラフト探検の成果に基づいて作成されたことはほぼ間違いないなく、林蔵自身の作画であると考える研究者も多いといわれる。しかし、いつ、誰によつて作成されたかは確定されていない。画像を拡大すると、書入れられた地名の文字に見覚えがある。『日本沿海輿地図』や『フランス中図（ペイレ図）』の文字と酷似している。おそらく同一人物の筆跡であろう。シーホルト事件の霧に包まれた「カラフト島図」と来歴不明の「ペイレ図」。謎めいた二つの地図は忠敬の工房で同じ人物によって作製された可能性が高いのではないだろうか。



(左が北)

「渾沌江 一名マンゴー」

(拡大図)



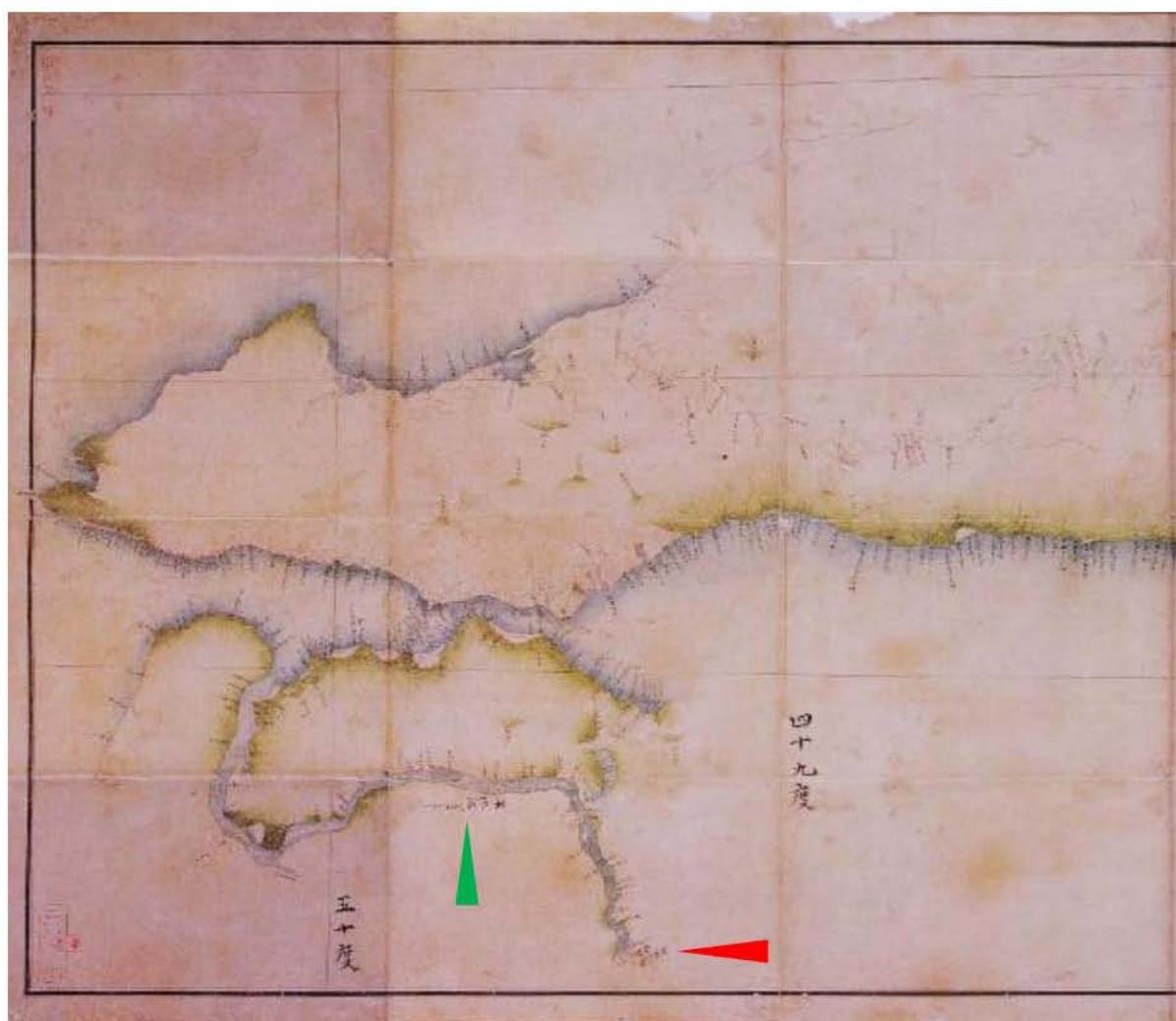
(上が北)

「徳楞 满洲仮府」

徳楞（デレン）は間宮林藏
が清国役人と会見した地

(拡大図)

※本図の詳細画像は国立公文書館のサイトで閲覧できる。
(検索結果画面の「閲覧(大判)」)



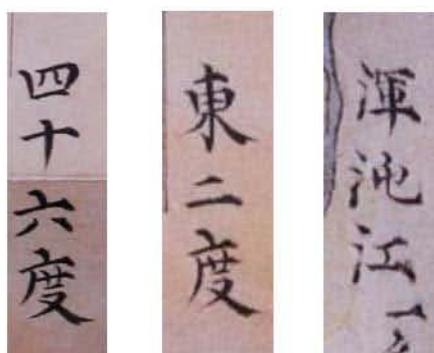


『カラフト島図』全図

左が北

131×57 cm

国立公文書館蔵



「東」「度」「十」「四」
の字形の特徴が一致
している

「江」の字形
の特徴が一
致している

「府」の字形
の特徴が一
致している



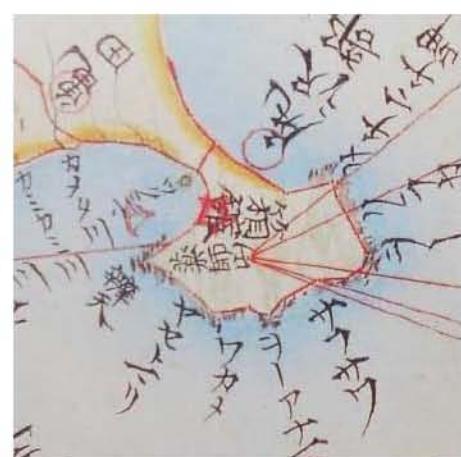
『カラフト島図』の筆跡



『フランス中図(ペイレ図)』



『伊能小図』(東博)



『伊能図』の筆跡

『フランス中図(ペイレ図)』

シーボルト事件で逮捕された高橋景保は、奉行所の指示により長崎通詞の吉雄忠次郎宛に「一昨年、シーボルトに送った日本図とエゾ地図を取り戻してほしい」という書簡（下欄）を送った。この書簡中の「エゾ地図」が今回紹介した『カラフト島図』であることは、地図に貼られた付箋により、ほぼ確実とされている。一方、文中の「日本図」のほうは、国立国会図書館蔵「カナ書き伊能特別小図」がそのまま没収された地図であろうと推定され、決定的な証拠がなかった。しかし近年、カナ書き小図の写図とみられる図がシーボルト側で発見され、これを精査した結果、「高橋景保がシーボルトに渡し、シーボルト事件で幕府に没収され、その間密かにシーボルトが写した日本図とは、カナ書き伊能特別小図にほかならない」ことが確定できた（国立民俗博物館・青山宏夫教授）とされる。昨年開催された「よみがえれ！シーボルトの日本博物館」展にこのシーボルトが持ち帰ったという地図が初公開されて話題となつたことは周知の通りである。

なお、国立公文書館には『カラフト島図』のほかに間宮林蔵の『北蝦夷島地図』（文化七年）七枚が所蔵されている。この地図は『東韃地方紀行』『北夷分界余話』とともに『間宮林蔵北蝦夷等見分関係記録』として重要文化財に指定されているが、これも筆跡が『カラフト島図』と似ており、また色彩や体裁が伊能図に似ているので参考までに次頁に掲載した。

以飛札（飛脚便）態々申達候、然者一昨年シイホルトへ送候日本圖
並申立候エゾ地圖之事二付、
某儀國禁を犯シ候由ニ而蒙御察度（非難）、恐入御事ニ御座候、
これにより依之右両圖如何様共いたし
急々取戻シ、早々差越可給候、
右二圖返り不申候而者、某罪
ハ勿論、其許ニも罪科不
可遁候間、馬場為八郎へ申
含、急々手段を以御取返上
封いたし、某名宛ニ而行奉
江御差出、早々相達候様ニ致
度候、得來左候得者、某罪も
軽、其許之罪も可薄存候
あいだ
間、吳々迅速ニ御差戻し専ニ
候、不具

高橋作左衛門

吉雄忠次郎様

『伊能忠敬研究』第55号 柏木隆雄 伊能研究会
『よみがえれ！シーボルトの日本博物館』青幻舎

【参考文献】

高橋昌保畫集（高橋昌久郎序）

同上歷本月份博物館收存 (林本富本詩文書)

参考 間宮林藏『北蝦夷島地図』

国立公文書館蔵

(国立公文書館のデジタルアーカイブで詳細画像を閲覧できる)

(付箋)「此所迄松前家見分」

(地名)「ホロトマリ」

(付箋)「此所迄最上徳内見分」



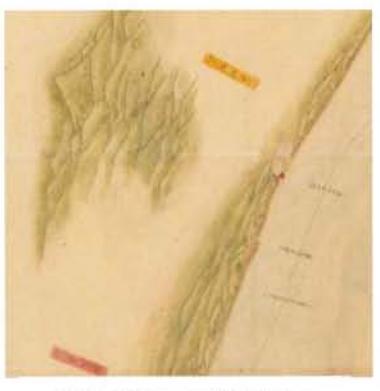
北蝦夷地西海岸図第3



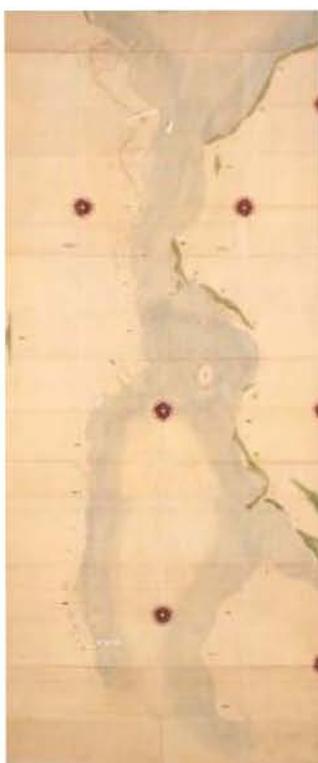
北蝦夷地西海岸図第5



北蝦夷地西海岸図第1



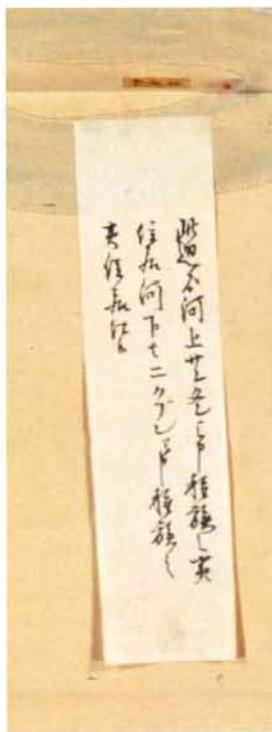
北蝦夷地西海岸図第4



北蝦夷地西海岸・東韃
地方東海岸迫処図

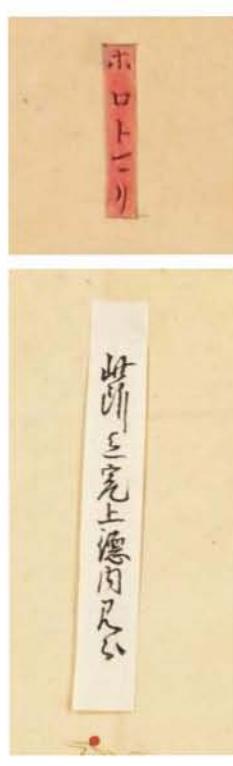
東韃地図

(付箋)「此所満州出張之役所有之候間宮林藏此所迄見分仕候」

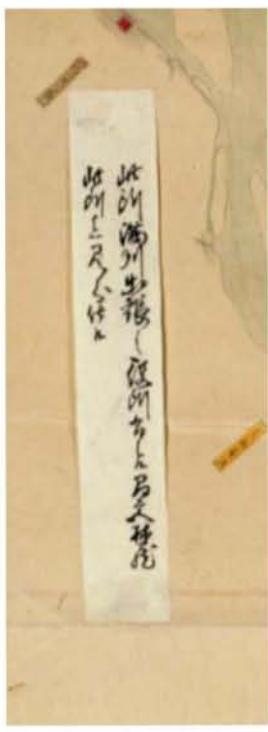


東韃地図

(付箋)「此辺方河上サンタンと申種族之夷住居
河下はニクブンと申種族之夷住居仕候」



北蝦夷地西海岸図第2



東韃地図

『奥州紀行を読む』

前田幸子

はじめに

『奥州紀行』は忠敬が数え三十四歳の年、安永七年五月から六月にかけて妻・ミチらと奥州松島に旅行した際の旅行記である。これまで取り上げられることが少なかつたが、この旅行記は当時の忠敬の興味や関心の対象、あるいは教養の範囲などがうかがわれて興味深い。壯年期の忠敬を知る貴重な資料ではないかと思う。

旅の概略

この旅行は安永七年（一七七八）五月二十八日に佐原を出立、往路は海岸沿いに北上して松島まで行き、帰路は内陸を南下して六月二十一日に帰着、計二十四日間の旅であった。旅行者は忠敬とミチ、それに杜氏の清兵衛と辻の利兵衛の四名、用務等はなく全くの観光目的の、文学と歴史の名所旧跡をめぐる旅であった。

『奥州紀行』は大部分が各宿場間の距離と駄賃に関する簡潔な記述であるが、名所旧跡では故事来歴や古歌などが文人的関心をもつて綴られている。一方、宿場の売女の存在に特段の関心を寄せ、関所での紙料酒代や世話料を拒否しようとしたり、社会的事象に対する関心や態度が示されていて、これも興味深い。同行の三人に關しては全く記述がなく、旅行中の逸話も少ないが、仙台まで同道した秋山惣兵衛については簡潔ではあるが、記述されている。この秋山惣

兵衛は、後年の第二次測量の際に偶然にも止宿先となり、二十四年ぶりに再会した。享和元年九月八日の『測量日記』（稿末参照）には奥州旅行での二人の出会いが詳細に述べられている。その中で忠敬が自身を「旅なれぬ身」としているのも、また興味深い記述である。

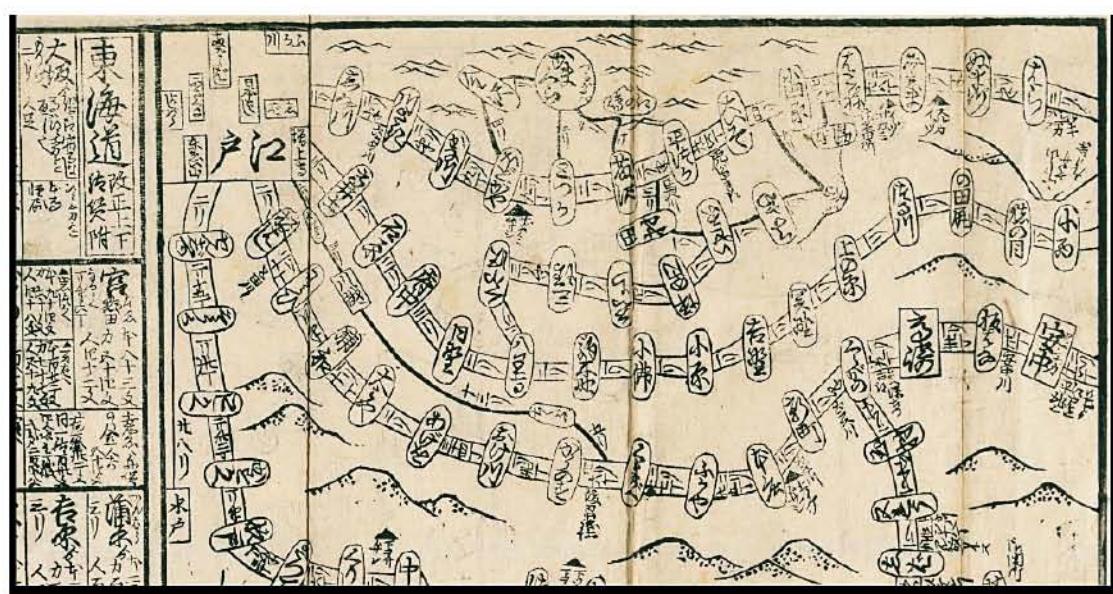
距離と駄賃

『奥州紀行』では各宿場間の距離と太賃（駄賃）が詳細に記録されている。一行は軽尻（本馬の半分二十貫目まで載せることができる馬）を雇っているが、駄賃からみて馬は一頭と考えられる。ミチが馬に乗り、他は徒步で行ったのであろうか。当時、駄賃は街道ごとに相場があり、それを表示した行程表があった。『奥州紀行』でも六月十五日の条に「行程記には一里廿五丁とある」という記述がみえるので、忠敬も行程表を携行したと考えられる。下欄は東海道等の宿場間の距離と駄賃の一覧表である。東海道と比べると、奥州街道は安かつたようである。距離と駄賃を綿密に記録していたところに忠敬の堅実な生活態度が表われている。

興味の変化

この旅行では忠敬は古跡を訪ね古歌を採録している。しかし十五年後の関西旅行の際には諸地点の方位角を計測するなど、地理学への傾斜を示すようになり、「詩歌を楽しむ文人スタイルの忠敬が十五年後には大きく変身した」と指摘される。しかし忠敬は後年の幕命による全国測量においても常に各地の神社仏閣を訪ね、古跡のある内陸までわざわざ側線をのばし、景勝地で和歌を詠んだりしている。文人的な趣味

ていたと考えるべきであろう。この『奥州紀行』の中にその関心の原型を見ることができる。



「道中獨案内圖・改正道法駄賃附」（寛政四年）
宿場名と宿場名の間は里数
左欄は駄賃

『奥州紀行』行程略図

(日付は宿泊日)



一、広野カミ木戸カミへ一里、太賃廿七文、此間三長沢、岩沢杯カミと云山坂有、此辺檜葉郡、
一、木戸カミ富岡カミへ二里廿二町、太賃六拾八文、此間二木戸川舟渡し、又井出村ニ小川あり、富岡泊、宿岩城屋清兵衛、

六月五日

一、富岡カミ熊川カミへ一里十四丁、太賃三十七文、此間二川有、熊川入口より相馬塚也、
一、熊川カミ長塚カミへ一里廿二町、太賃五拾五文、
一、長塚カミ高野カミへ一里八町、太賃三拾五文、
一、高野カミ小高カミへ二里半、太賃六拾三文、
一、小高カミ原の町へ一里廿四丁、二里半なるへ太賃六拾五文、此間飯田川有、橋あり、
一、原町カミ鹿嶋カミへ一里六丁（一里廿四丁なるへし）、太賃四十四文、
此所ニ鹿嶋明神有、此里の入口左側大茶屋ニ泊、

六月六日

一、鹿嶋カミ中村へ二里卅一町、太賃七拾五文、此所相馬因幡守城下五（六）万石、五月中の申ニ大祭礼有、小高より原の町の間ニ大原あり、野馬多し、此馬を家中の諸士大勢出召捕、小高の妙見へ献するよし、尤諸士野馬を召捕へ候ものニハ、相馬侯カミ馬代御出し被成買上ニ成、則野へ御放し被成よし、此辺行方郡、武鑑ニ中村ハ宇田郡と有、
一、中村カミ黒木カミ廿八町、太賃廿壹文、
一、黒木カミ駒ヶ峯カミへ一里八町、太賃三十三文、駒峯カミ相馬、仙台の堺ニ而、從是仙台領なり、婦人ハ此所ニ入切手無之候而ハ、帰ニ出口ノ

一、広野カミ木戸カミへ一里、太賃廿七文、此間三長沢、岩沢杯カミと云山坂有、此辺檜葉郡、
一、木戸カミ富岡カミへ二里廿二町、太賃六拾八文、此間二木戸川舟渡し、又井出村ニ小川あり、富岡泊、宿岩城屋清兵衛、

六月五日

一、富岡カミ熊川カミへ一里十四丁、太賃三十七文、此間二川有、熊川入口より相馬塚也、
一、熊川カミ長塚カミへ一里廿二町、太賃五拾五文、
一、長塚カミ高野カミへ一里八町、太賃三拾五文、
一、高野カミ小高カミへ二里半、太賃六拾三文、
一、小高カミ原の町へ一里廿四丁、二里半なるへ太賃六拾五文、此間飯田川有、橋あり、
一、原町カミ鹿嶋カミへ一里六丁（一里廿四丁なるへし）、太賃四十四文、
此所ニ鹿嶋明神有、此里の入口左側大茶屋ニ泊、

六月六日

一、鹿嶋カミ中村へ二里卅一町、太賃七拾五文、此所相馬因幡守城下五（六）万石、五月中の申ニ大祭礼有、小高より原の町の間ニ大原あり、野馬多し、此馬を家中の諸士大勢出召捕、小高の妙見へ献するよし、尤諸士野馬を召捕へ候ものニハ、相馬侯カミ馬代御出し被成買上ニ成、則野へ御放し被成よし、此辺行方郡、武鑑ニ中村ハ宇田郡と有、
一、中村カミ黒木カミ廿八町、太賃廿壹文、
一、黒木カミ駒ヶ峯カミへ一里八町、太賃三十三文、駒峯カミ相馬、仙台の堺ニ而、從是仙台領なり、婦人ハ此所ニ入切手無之候而ハ、帰ニ出口ノ

六月七日

一、山下カミ亘迄二里四丁、太賃五十六文、此辺亘理郡、
一、山下カミ岩沼カミへ二里半、太賃七重拾壹文、此間二大熊川有、大河ニテ舟渡し、里人の言ニ、あぶくま川と云、岩沼より名取郡也、竹駒明神有、古跡能社なり、社ニ三、四丁側ニ二本の松有、男松女松相生のよし、當時ハ男松の方枯て、女松斗葉を生しあり、芭蕉の句ニ、桜より松はニ木の三月越し、と記したる碑、竹駒の社の前ニ有、

六月八日

一、岩沼カミ増田カミへ一里廿九丁、太賃五拾貳文、岩沼ハ仙城本道中なり、
一、増田カミ中田カミへ三十五町、太賃廿三文、
一、中田カミ長町カミへ一里、太賃廿七文、名取川橋有、

六月九日

一、長町カミ仙城国分町カミへ一里十二丁、太賃三十文、仙城入口ニ廣瀬川橋有、仙城宿国分町小幡屋太兵衛方ニ滞留、八日九日兩日也、八日ハ丸ニ休、九日ハ所々見物致し候、尤、鉢田より奥州分秋山惣兵衛と申仁と一同ニ相成、国分町迄同道致、右宗兵衛ハ肴町問屋へ参申候、此仁肴商売致し、廻船を持銚子江戸へ積入申候よし、

六月十日

一、国分町カミ塩釜カミへ四里半、此間名所旧跡多有之候儘、歩行ニ致し候、町離ニ釈迦堂有、したれ桜の大木おぼし、余国ニ是程の大木の数多をミズ、春の盛嘸と思れたり、少し行ハ宮城の野あり、萩の名所也、往古ハ城下此辺宮城野と云しと見えたり、城下カミ松嶋カミ迄宮城の郡也、宮城野より福浦村へ出ル、此村ニ用水の川有、冠川の末也、夫より八幡村へ行、此村ニ八幡宮有、是則奥州の八幡八幡なり、宮城の側ニ国分寺あり、六十六部の納経の所なり、拵八幡村平左衛門と云ものゝ裏ニ沖の石有、八、九間四方程の泉水の中ニ自然石の峨々たる石組あり、往古此辺海中と相見へ候、里人の物語ニハ、沖の石ハ当所田畠の中ニあり、一石ニ不限すべて沖の石なるよし、歌の意ニよれハさもあるへし、同村ニ末の松山の寺有、末松山と云額有、寺の後ニ小山あり、赤松漸五、六本あり、其内ニ今ハ小杉など交りたり、此五、六本の松ハ余り年を経し様ニもミヘズ、甚いぶかりしに、客殿の前ニ末の松山の古哥数多書連ネ、あるまゝ二詠吟すれハ、中ニ俊成卿女の哥ニ、

浪カミニ移る色にや秋の立カミぬらん宮城の原の木の松山と云哥のあるまゝニ、初て古の末の松山なりし事を悟ぬ、定家卿の哥ニ、
浪カミ越ぬ袖とハかねておもへにき木の松山尋ね見しよリ、

西行法師の哥ニ、たのめおきし其いゝことやあたニなりて浪越ぬべき木の松山。

其外末の松山ニ題せし哥の員多けれど、行先も遠けれハ、三首を書留ぬ、夫ろ紅葉山あべの松ハしと云名所有、塩竈の側ニ野田ノ玉川有、日本六玉川の一と云伝り、今ハ少しの流にて水も清からず、古ハ大流ニて、水も清ルなるへし、側小碑有、月うつる野田の玉川來て見れハ水かけ清くすめる世の中、と云哥有、

一、塩竈明神へ参詣致し候、普請の結構、神社ニ類少し、正面ニ両社有、右宮左宮と云、里人の言ニハ鹿嶋香取の神なるよし、右に塩竈の社有、二重の玉垣、二重の拝殿なり、町の中ニ塩釜四ツあり、是則明神の初而塩たきし釜なり、古ハ七ツ有之しに三ツハ海へ沈入しより、其所を釜か淵云、此塩竈船を雇可申存候所、松嶋まで価七百銅と申候はゝ、岡ヲ松嶋へ参申候、道法式里半あり、明神の山を越し往還へ出、一里十二丁行ハかわら焼と申所へ出申候、此所ニ二、三軒茶や有、夫ろ松嶋へ一里六丁あり、松嶋宿あふきやと申候、能宿ニ御座候、宿ろ富山へ武里半、富山ろ塩竈へ五里、舟を都合七百銅ニ雇、まづ富山の禁へ舟を着、夫ろ岡十八、九丁行は富山也、観音堂有、此堂ハ飛彈内匠が一夜ニ建し堂と、里人云伝へり、此寺の座敷ろ松嶋并ニ大海を眺望致候へハ、八百八嶋の景一眼ニ相分り、其景色筆墨の及所ニあらす、方言ニ松嶋の景ハ富ニありと、誠ニゆへあるかなとかんしたり、松嶋ろ富へ行舟中眺望の嶋々、五大堂、福浦嶋、二子嶋、経の嶋、おしま、松吟庵、座禪堂、朝日嶋、左に高木村、磯崎村塩焼の浜

あり、に今塩釜のゆゑんニて、塩焼かま七ツ限のよし、富山ろ遠眺望すれハ、宮戸四ヶ浜、大高森ハ仙城侯、大海通船を改候所也と、其外大はま、むろ浜、津き浜、さと浜、さむ沢、ほうしま、のゝしま是を七嶋と云よし、石浜、かつらしま、とうくう、よかさき、せうふた、松ヶ浜、花ふし是も七浜と申よし、何れも漁人又ハ仙城流人嶋も有之と承候、広事也、右ハ富の眺望なり、夫ろ舟ニ乗、伊勢しま、小町しま、布袋嶋、大黒嶋、きい長しま、内裏しま、甲しま、かしま、ゑぼし嶋、はたかしま、女御のしま、三ツの小しま、まかきしまを経て塩釜に着申候、塩釜の浦の惣名の千賀の浦と称し申候、まかきしまの先ニ釜か淵、并ニ古ヘ塩をたき候古跡有、嶋々の員と云、風景と云、筆ニ尽しかたし、松嶋山瑞岩寺ハ、國主よりの普請ニて、地領廿四貫文のよし、座敷の結構、金襖、彫りもの言ニ伸かたし、宿ろ案内を頼可被参候、当寺の開山ハ真壁平四郎発心和尚のよし、其以前ハ天台宗のよし、最明寺殿行脚の折ふし、瑞岩寺ニて泊を乞候へ共、許容無之、発心和尚と同鐘樓堂ニ通夜致し、最明寺殿鎌倉ニ御帰の後、天台の衆徒を追放、経を焼捨是を經かと云、發心和尚へ此寺を与られしよし、後唐僧力クママン禪師、是を瑞巖寺の開山ニも致し候、又鎌倉建長寺開山大学禪師も其後住宅致申候よし、雲居禪師を中興開山とも称し申候、是ハ里人の言といへとも利あるによりて、記し置也、塩釜へ九ツ過ニ着、大田屋ニ泊、又々塩竈ノ神を拝覽致し申候、塩釜四ツ町中ニ有、和泉三郎忠衡獻し鉄塔有、



六月十二日

一、塙釜カミより国分町へ四里半、此間ニ壺の碑有、道ニ追分ありてはつか二町四十間の側なり、多賀城の古跡なり、此辺もおくの細道の内なるべし、碑銘ハ別ニ有ニより略之、岩切村ニ壺のはし、又ハとたゑのはしとも云古跡有、小橋にて誠ニ見るニ足らずと云へとも古奥海道の橋なるへし、此辺をも奥の細道と云、元の松山と云有、末の松山ニ対したる名なるへし、本の松山、末の松山共ニ古の海道と見へたり、本道中ニ冠川有、はし有、其側二十府のすげと云旧跡あり、二ヶ所也、一ヶ所ハ田の端ニあり、一ハ家の後ニあり、一二間四方程の間ニ昔あり、是も古の海道シマツ見へたる沼ニてもありしなるべし、今市と云宿の先ニびくに坂と云有、左へ少し行ハ小鶴村ニ小づるがいけど云小池有、昔ハ大池ニて靈ありしとかや、今ハ小水ニて何もなし、夫シテ原町城下国分町小幡ニ泊り申候、

六月十三日

一、国分町より長町へ一里十二町、太賃三十七文、一、長町より中田へ三十二丁四十間、太賃廿七文、一、増田より岩沼へ一里卅町十六間、太賃四十七文、一、岩沼より楓の木へ一里廿五町四十間、太賃四十五文、此間左ニ大熊川、右之方の山ニ千口松と云ふらしたる所有、其所ニ昔縁丸と云鷹の石ニ成たる石の有よし、岩沼ハ古内主殿八千石、仙城の家臣たり、一、楓木より舟ノ廻一里十一丁十六間、太賃三十

三文、此間ニ道の左ニ船岡のたてあり、要害の宣所也、右ニ大山あり、たてと山の間ニ纏ニ三丁斗是塞ハ本道の通路なし、舟岡ニ芝田九郎治五千石、仙城の守護なり、

一、舟廻より大河原へ一里十五町廿六間、太賃三十五文、

一、大河原より金ヶ瀬へ三十丁、太賃廿壹文、此間並木ニ漆多し、大河原迄芝田郡なり、

一、金ヶ瀬より刈田の宮へ一里十二丁、三十七文、一、刈田宮より白石へ一里廿四丁、太賃四拾五文、此辺刈田郡なり、此所ニ泊、

六月十四日

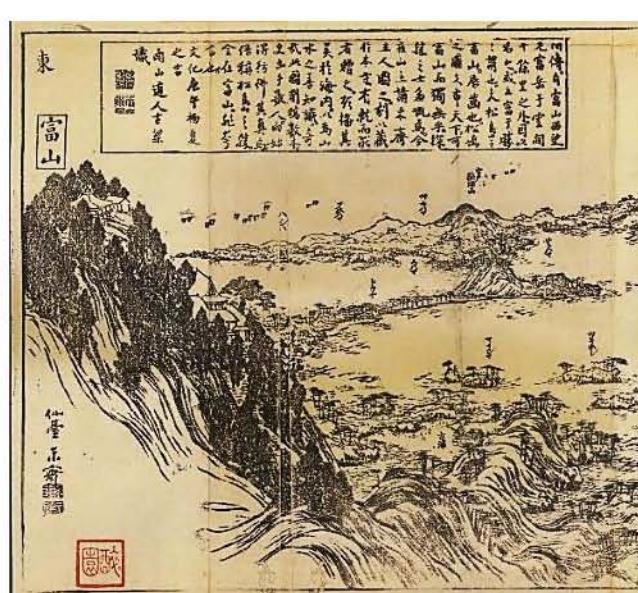
一、白石より齊川へ一里十五丁、太賃四十五文、白石の城ハ片倉小十郎持城也、

一、齊川より越河へ一里十六丁、太賃四拾壹文、此所仙台本道の関所あり、駒ヶ峯より切手を取不申候間、六ヶ敷隙を取申候、尤も仙台宿より関所役人清三郎へ手紙參候へ共、先へ紙料酒代を出し不申候間、其旨を先ニても云兼、延引ニ及申候。後清三郎より世話料百銅出し可申様ニ被申候間、早速遣し申候所、同道ニて関所を通し、又貝田より八丁目へ関所切手入用のよし下書を認、すぐニ八丁目へ通切手ニ致し、貝田ニて判を貰參申候、

一、越河より貝田へ十八町、太賃十五文、下紐ノ関有、



『奥州紀行』六月七日の部分 伊能忠敬記念館蔵



『奥州松島全島旧新三図附瑞巖寺図』
(文化七年) 国立国会図書館蔵

經（義經）の腰かけ松と云有、高壹丈武、三尺二すきずして、大サニ抱余、其枝葉八方ニ垂れ、前後左右の開凡三十間四方と云伝り、枝葉土ニ垂れ、本ノ行所不知程の事なり、画ニも図し兼たり、高砂の松、曾禰の松と云とも及がたかるへし、女松なり、関外無双なるへし、大木戸前ニ篠松と云有道端也、右よしつねの腰かけ松占田畔を伝へ行ハ、弁慶の硯石有、自然石にて水溜あり、硯ニ似たり、

一、藤田なるべし桑折桑折の右へへ一里七丁、太賃廿五文、此太賃、前ど入達

一、桑折桑折の右へ瀬の上瀬ノ上へ一里十二町、三十六文、桑折の右へ

一、瀬の上瀬ノ上福嶋行道あり、へ二里八丁、太賃五十四文、泊宿ハ奥山兵藏也、小家なれとも売女無之、飲食宜し、外ハ家々ニ売女多し、此所板倉伊三郎三万石の城下也、從是忍郡也、

六月十五日

一、福嶋福嶋の右へ根子町（清水町とも）へ一里廿丁、太賃四十七文、行道配二里、廿五丁と有

一、清水町清水町の右へ八丁目へ一里半、太賃三十六文、一、八丁目八丁目へ油井油井の右へへ一里七丁（油井油井の右へ二本柳二本柳の右へへ一里七丁）、太賃三十毫文、此辺安達郡也、二本松まで、

一、油井油井の右へ二本松へ一里、太賃廿七文、

二本松の入口油井の地内二八軒茶やと云有、此前二道の左方十町斗脇ニ安達原黒塚有、少し原の形残れり、けつめの石、するすみの石杯と申もの有之よし承候、

一、二本松二本松の右へ杉田へ一里四丁、太賃三拾文、城主丹羽加賀

一、杉田杉田の右へ本宮へ一里十三丁十八間、太賃三拾文、

一、本宮本宮の右へ高倉高倉の右へへ一里十一丁町、太賃三拾文、

一、杉田辺杉田辺の右へ浅香郡也、此所ニ五百川と云有、

一、高倉高倉の右へ福原福原の右へへ一里卅五丁、太賃四拾毫文、

一、福原福原の右へ郡山郡山の右へへ十九丁、太賃拾九文、郡山柏や九兵衛と所ニ泊、此家ニハ売女無之候へ共、外宿ハ何れ五人七人宛売女をかゝへ置申候、柏屋ニても脇脇の右へ招寄申候様ニ相見へ候、本宮ニも売女有之候、

六月十六日

一、郡山郡山の右へ日出の山日出の山の右へへ廿六丁、太賃十九文、

一、日出の山日出の山の右へすか川すか川の右へへ二里五丁、太賃五十八文、

一、すか川すか川の右へ笠石笠石の右へへ一里半、太賃三十七文、

一、笠石笠石の右へ新田新田の右へへ一里半太賃三十七文、新田の前ニ矢吹と云宿有、新田と十五日代のよし、宿宜泊ニよし、此辺白川郡、新田迄本道中、從是棚倉、水戸へ分ル、

一、新田新田の右へ川原田川原田の右へへ二里半、太賃六拾武文、

一、川原田川原田の右へ堤堤の右へへ二里十二町、太賃五十六文、

一、堤堤の右へ棚倉棚倉の右へへ一里十二町、太賃三十四文、城主小笠原岩丸高六万石なり、宿ハ佐川式右衛門ニ泊申候、家ハきれいニ御座候、

六月十七日

一、棚倉棚倉の右へ八槻八槻の右へへ一里、太賃三十武文、八槻ニ領候よし、

一、八槻八槻の右へ台宿台宿の右へへ一里、太賃三十武文、

一、台宿台宿の右へ伊香伊香の右へへ十八町、太賃十六文、

一、伊香伊香の右へ戸塚戸塚の右へへ一里半、太賃四十三文、戸塚の並ニとうたちと云所有、其間八丁伝馬代り番也、

一、戸塚戸塚の右へ下関下関の右へへ一里半、太賃四十三文、此間ニ中の町と云有、下関と代番なり、

一、下関下関の右へ徳田徳田の右へへ武里、太賃五十六文、徳田と並ニ大ぬかりと云所有、代り番なり、徳田と大ぬかりの間ニ奥常の堺あり、從是水戸領入口也、

一、徳田徳田の右へ大中大中の右へへ一里八丁、太賃四十四文、

一、大中大中の右へ川原野川原野の右へへ二里、太賃五十八文、此所ニ泊宿悪し、

六月十八日

一、川原野川原野の右へ和和の右へ（上）淵淵の右へへ一里十六町、太賃三十八文、

一、上淵上淵の右へ町屋町屋の右へへ一里八丁、太賃三十武文、此間ニ入四間へ入道有、海道海道の右へ一里なり、玉簾のたき有、

一、町屋町屋の右へ太田太田の右へへ武里、太賃長五拾文、

一、太田太田の右へ額田額田の右へへ一里半、太賃三十九文、

太田ハ中山備前守城あり、今ハ大膳なり、承申候、舟津の

一、額田額田の右へ田彦田彦の右へへ二里八町、太賃五十三文、

一、田彦田彦の右へ枝川枝川の右へへ一里、太賃廿六文、

田彦ニ岩城道の追分有、水戸水戸の右へ枝川枝川の右へへ二里、沢村沢村の右へ石上石上の右へへ一り半のよし、

一、枝川枝川の右へ水府下町水府下町の右へへ一里、太賃廿八文、

下町ニ止宿止宿の右へ十九日滞留、御城、御靈屋、五百羅漢見物致し候、

一、水戸水戸の右へ長岡長岡の右へへ二里、太賃五十六文、

一、長岡カミナガと芹沢セイザク（上谷）へ三里、長岡の先ニ小
葉カエデへ出申候、紅葉と上合カミナガハ並村也、
合ハ紅葉と代り番のよし、
一、上合カミナガと芹沢新田セイザクシンタへ二里、太賃五十八文、上
寺と村次のよし、玉造会所ニて被申候まゝ、牛
堀迄三百銅ニて通し馬を雇參候、歩行ならハ宜
候へ共、馬ニて參候ニハ玉造通水戸エシタツシタへハ不宜候、
鉢田上り宜候、

六月廿一日

一、玉造エシタツと牛堀ウシタガへ五里、
一、牛堀ウシタガと佐原サハラへ八時半ニ着申候、但し牛堀め
うがや方舟を立乗申候、舟賃武百文なり、出立
後長雨ニて路次も不宜、致難儀候へ共、乍四人
無異ニ道中致し罷帰申候、

仙城本道中カミナガ最上羽黒山道あり、○楢木タチバナと村田
へ三り、村田タチバナと川崎カワサカへ三り、川崎カワサカと野上ノイエへ一り
八丁、野上ノイエと笹谷ススキヤへ二り半、是をサゝや越と云、
○大河原オオカワラと村田タチバナへ二り半、川崎カワサカ、野上ノイエハ前ニ同
じ○葛田宮カマツノミコトへ一り八丁、永野エリノ、一り半猿花サルハナ、夫ウ
川崎カワサカ、野上ノイエへ出申候、

仙城カミナガ最上へ出ル道を二口越と云、国分町クニブニマチと二
り半あやし、二り半はゝ、二りの志り、三り二
口峠カツカミ、二り山寺カツサンジ、二り天童カツテンドウ、六田ロクダ、一り四丁た
て岡カツカミ、一り九丁飯田カツミヤ、二り尾花沢カツオハサワ、一り九丁柳
沢カツツバカミ、三り舟方カツボカミ、二り清水カツシメ、一り相貞カツサヘイ、四り古口カツコ、
二り十六丁清川カツシラカワ、三りかり川、

松嶋カツシマ最上羽黒山カツカミカツシマへ出ルニ銀山越カツシマカツシマと云有、吉岡カツオカ、
古河カツガタ、岩手山カツイマツカミ、宮村カツミチ、梶沢カツサカワ、シト前カツシマツカミ、笛森カツツバカミ、向

【参考文献】

『伊能忠敬書状』千葉県史料 近世篇 千葉県

※旅行中の宿泊先を傍線で表示した。
※名所旧跡、目印等を太字で表示した。

(了)

安永七年

伊能三郎右衛門

町、蟬カミキリ、新庄カミヤマを通候よし、單もの帷衣袴ニ半分の綿入
のミ持參ニテ、道中長雨ニテ度々致難儀候、仙
城、塩釜、松嶋カツシマへ參候而も、右の衣服ニテハ凌
かね申候、此上ハ最上象形をかけ候人あらハ、
綿入等油断有ベからず、六月中奥羽ノ山々ハ
雪が多相見へ候、藤田、桑折、辺ニて冰雪の売
人出申候、珍敷事なり、

士用まへの旅ゆへ、單もの帷衣袴ニ半分の綿入
のミ持參ニテ、道中長雨ニテ度々致難儀候、仙
城、塩釜、松嶋カツシマへ參候而も、右の衣服ニテハ凌
かね申候、此上ハ最上象形をかけ候人あらハ、
綿入等油断有ベからず、六月中奥羽ノ山々ハ
雪が多相見へ候、藤田、桑折、辺ニて冰雪の売
人出申候、珍敷事なり、

測量日記 第二次測量（本州東海岸）

享和元年（一八〇二）九月八日

雲天、朝六ツ後女川浜出立（中略）七ツ頃に

着、止宿秋山惣兵衛。此夜測量、海中に江ノ島
あり、家八十六軒あり。仙台領の流人島のよし、
余、先年奥州松島を遊覧しけるに、頃は皐月末
の八日、佐原を出立。鉢田カブタタという所まで乗船す。
風波ありて尺取らず、漸々、串挽カツリへ着て船泊り
しける。傍にも旅人乗し舟ありける。岱越しに物語れば、松島より遠き分ヶ浜カブタタという所の秋山
惣兵衛カブタタという者にて、交易の事に銚子港カブタタへ來
り。復、その國へ帰りけるなり。彼人いいける
は、一人旅の物寂しければ、願くば同伴し賜え
かしと乞し程に、此方も旅なれぬ身の幸と同道
しけるに、日々駅次、止宿の事などいと懇に執
斗カツひける。十日程を経て仙台の城下に着ける
に、此所の名所など案内し、且、酒食迄も篤く
饗應カツカミしける。別に臨て惣兵衛カブタタいけるは、貴邦
は吾郷を去る事百里余の山海を隔てぬれば、お
うが難かるべし、余は交易の為に銚子港、又は
東都へ幾度も往来す、その行路なれば、必尋ね
問んと約して別れぬ。それより年を経ぬれど、
互に音信をせざりしに、此度台命をこうむり、
國々の海辺を來往しける。此國のもよりも令あ
りて止宿の事迄もさたせられけるに、不思議
に、此分カツケ浜なる秋山惣兵衛カブタタなる者にとまり会
ぬ、眞に深き因縁にてぞありける。終夜往事を
語り合い、指を屈すれば安永七戊戌の歳にて二
十四年にぞなりける、主じも別離を惜み、此先
の泊々二三日の間送別しける。

加賀藩十村役の手代たちが見た伊能隊

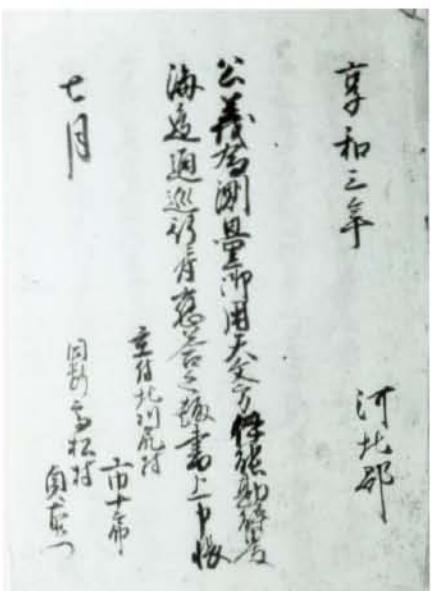
—「新田家文書」より—

河崎 倫代

はじめに

今回紹介する「公儀為測量御用天文方伊能勘解由殿海辺通巡行ニ付應答之趣書上申帳」は、『加能史料研究 第6号』(1994年)に解説文を、『金沢学院大学附属高等学校紀要 第14号』(1997年)に口語訳文を掲載した史料である。いずれも石川県で発行された雑誌である。20年以上を経て読み直してみて、伊能忠敬没後二百年を来年にひかえた今、全国の会員諸氏に一読いただくのも一興かと思うに至つた。

加賀藩領内測量は享和3年(1803)、第4次測量の時であり、まだ伊能忠敬の個人事業的性格が強かつたので、第5次測量以後のような強制力もなく、測量隊への対応にはかなりのばらつきがあった。加賀藩では幕府からの通達以外に独自に情報収集をおこない、測量隊への対応策を決めた。



(表紙)	享和三年	河北郡
公儀為測量御用天文方伊能勘解由殿 海辺通巡行ニ付應答之趣書上申帳	主付北川尻村 市十郎	
同断高松村	貞右衛門	
七月		



①測量隊の「隠密がましき」行動への警戒心から、村高・家数、郡境・村境などの距離や道程を答えない。

②測量御用が後々の境界論争の原因になることへの警戒心から、測量結果を後年の証拠としない。杭を打つときは十村が立ち会う。

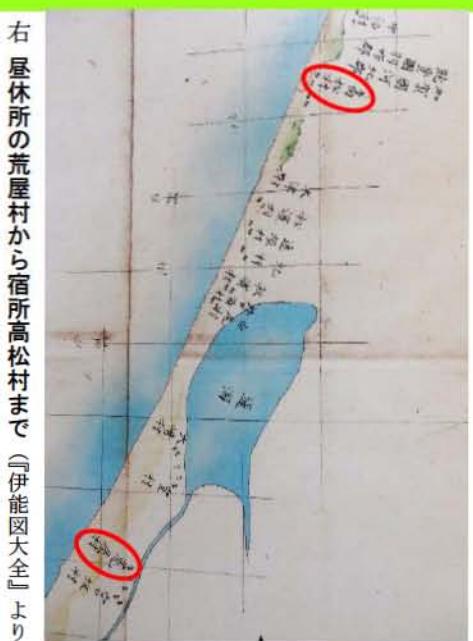
③忠敬は「公儀召し抱え」ではない「元百姓、浪人」であるから、藩士や十村は挨拶に出ない。「巧者な手代」に対応させる。

このような方針のもと、石川・河北郡の郡境から高松村の宿所まで丸一日案内役を務めた十村の手代たち—徳兵衛・庄七・八郎兵衛・三助—4人の奮闘記が、この報告書のもととなつている。

この区間は現在の内灘砂丘にあたり、海岸線が単調なためか、測量方法や器具類に関する記述は少ない。手代たちの「巧者」な応対ぶりに注目して欲しい。しかしそれだけではない。「巧者な手代」に声を荒げる弟子たちと、不愉快な様子を見せることがなく仮小屋での昼食に感謝する忠敬の対比も示唆に富む。行く先々でのトラブルを最小限に食い止めて、17年にわたる全国測量を達成したのは、忠敬のこのような人間性や处世の仕方にあつたのではないだろうか。高松宿では村役人たちに天文測量の見学を勧め、測量器具も見せている。麻田派天文学の公開性を証明する光景である。

口語訳にあたつては、原文に忠実にと心掛けたが、現代風に改めた箇所もある。例えば、「会釈」では軽い感じがするので、「挨拶」を用いた。また、文中の(一)はすべて筆者の補足・説明である。

今からおよそ二三百年前の内灘海岸で、伊能忠敬測量隊に実際にあつた出来事を、いくらかの臨場感をもつてお伝えできれば幸いである。
加賀藩十村役新田家は、羽咋郡北川尻村（現在の宝達志水町北川尻）に住し、代々十村役を勤めた家柄で、市十郎はその九代目にあたる。測量御用の翌年、文化元年（1804）、河北郡倉見村（現在の津幡町倉見）へ引っ越しを命じられて倉見市十郎と名乗つた。現在、子孫は新田姓を名乗り、伝来文書は石川県立歴史博物館に寄託されている。



右 荒屋村から大福寺山を望む（日本写真印刷株式会社蔵）



大崎村 白尾村 外日角村 秋浜村 北村
遠塚村 松浜村 木津村 高松村
是迄河北郡 九ツ頃二着 止宿 島屋市郎右衛門
此夜晴天測量 此所方所口町七尾なり泊触を出す

(口語訳)
同四日、朝から晴天。手分けする。
先手の郡藏は六つ頃、我らは六つ半頃に橋粟
崎村を出發し、粟崎村へ向かう。

ここから河北郡になる。

宮坂村、荒山村、室村、大崎村、白尾村、外日角村、秋浜村、北村、遠塚村、松浜村、木津村、高松村、ここまでが河北郡である。
九つ頃に宿泊先の嶋屋市郎右衛門宅に着く。
この夜は晴天で測量をする。
ここから所口町七尾である。泊舎を出す。

同四日 朝方晴天 手分 先手郡藏ハ六ツ頃
我等ハ六ツ半頃 二橋栗崎村出立 向栗崎村
是方河北郡ニなる 宮坂村 荒屋村 室村

なお、「測量日記」には、この日のことが次のように記述されている。

「測量日記」の記述

同四日早晴天。午初先至郡邑。上官派至。六事派。榜票
後村。赤立。向。雲。傍。村。是。今。河。北。郡。之。方。宮。坂。村。葛。鹿。村。
室。村。赤。傍。村。白。尾。村。卯。日。角。村。姑。渡。村。北。村。
赤。隊。村。北。渡。村。木。津。村。亥。松。村。此。謂。亥。是。今。河。北。郡。北。渡。村。
九。月。上。宿。修。在。市。赤。立。此。夜。晴。天。測。室。以。附。所。口。町。泊。船。至。夜。
七。尾。小。川。泊。船。至。夜。

測量方御役人伊能勘解由殿、昨四日栗ヶ崎
村出立、高松村海辺通致測量相越候間、宿用意
有之、測量之節其村内浜通致案内候様、執斗可
申旨等之先触罷、三日夕七つ時頃向栗崎村江到
来二付、早速村々申渡、猶又栗ヶ崎村江出立
之時刻等聞合二遣候所、昨四日八二手合二仕、
勘解由殿ハ朝六つ時頃出立、御郡境向栗ヶ崎村
領手初二而、荒屋村領迄致測量候由、右弟子中
一手合二而晚七つ時頃出立、荒屋村領手初二而
高松村迄致測量可申段、栗ヶ崎村役人中迄申談
候旨二付、具手当二仕、手代共兩人并先案内之
村役人四人二人足拾五人相添、御郡境江出迎為
致置申候所、弟子中四人昨朝六つ時頃御郡境江
罷越候二付、夫々致会釈、是より河北郡与申達、
則手代等茂手分ケ仕居、一手合右弟子中二差添
罷越申候所、無程勘解由殿茂被罷候二付、手代
等丁寧ニ致会釈候得者、勘解由殿より御苦勞二
候与申挨拶有之候故、是より河北郡与申達候而
附添申候、

一、勘解由殿手合、御郡境向栗ヶ崎村領金くさ
り様之物被引懸候二付、手代より申入候者、
身請申候所金くさり様之物為御引成候義ハ、
今般御通筋村々郡境より郡境迄之丁間暨
村々領より領江之丁間御志らへ之儀候哉、若
郡中等之丁間御打立之儀ニ候得者、差支之趣
有之難相成段申達候所、一向左様之儀ニ而ハ
無之、今般者測量為御用致巡行候義故、測天
量地与申候而、地を量而天を測申所作而已ニ
而、勿論國郡又者村々領より領江之丁間相志
らへ候等之儀ニ而ハ無之段被申聞候二付、測

量之儀ハ先達而公辺より被仰渡、夫々御用指
支不申様相心得可申旨、重役之面々より嚴重
二申渡有之候間、如何様共被仰渡之通りニ相
心得、御用相弁可申義ニ候間、領より領迄御
打詰無之、所々ニ而測量被成候義ハ指支不申
段申入候所、尤其通り与被申聞候而、則金く
さりハ被引候得共、荒屋村領迄ハ磁石等を居
山々方位等被見当候義ハ無御座候、

一、先立之役人ハ領付之役人ニ候哉、先触ニ申
送候通り、村々領境江其領付役人罷出居申候
哉与被相尋候ニ付、左様ニ而者無之、當郡中
全ク右之者共御先立相勤申儀ニ御座候、御
用之品私共江被仰聞候様ニと、手代共より申
達、付添步行仕候所、本根布村・大根布村領
之間ニ而者何之尋も無之、宮坂村黒津舟之下
二而、是迄茂向栗ヶ崎村領ニ候哉と被相尋候
ニ付、此辺宮坂村領ニ而御座候段申達候、

一、同村浦ニ而、向二三角形之山相見候、何と
申山ニ候哉与被相尋候ニ付、大福寺山与申候
何程与申覺ハ無之候得共、余程隔り居申ニ付、
海辺ニ仮り小屋を建、御屋所ニ拵置申段申達
候、

一、右之外、村々巨細成儀尋茂無御座、勿論村々
領境暨高數・家數之儀等、聊以尋被申候様成
義無之候而段々付添、荒屋村領屋休所仮小屋
二至り申ニ付、此所ニ而御休足被成候、御屋
食可被成哉与申達候所、則被相休、中食ハ切
飯・にしめ等ニ而、壱人前之弁当箱入之呪差
出申候得者、諸之小屋与申、弁当茂壱人前別

二被成候与被指出候儀、甚御丁寧之至り、發
足之砌より數ヶ国致巡行候得共、ケ様之御趣
向初而之儀ニ而感心仕杯与入念之挨拶有之、
夫より駕籠ニ而高松駅江九つ時頃被致着候、
一、荒屋村領仮小屋ニ而被致昼食出立之時分、
飯米代として錢式百文被払候ニ付、請取申候
而、則請取書之儀手前帳面ニ書記被指出候ニ
付、荒屋村肝煎宇右衛門名前ニ而印形仕申候
一、弟子中四人之面々一手合ニ而罷越、荒屋村
送候通り、村々領境江其領付役人罷出居申候
哉与被相尋候ニ付、左様ニ而者無之、當郡中
全ク右之者共御先立相勤申儀ニ御座候、御
用之品私共江被仰聞候様ニと、手代共より申
達、付添步行仕候所、本根布村・大根布村領
之間ニ而者何之尋も無之、宮坂村黒津舟之下
二而、是迄茂向栗ヶ崎村領ニ候哉と被相尋候
ニ付、此辺宮坂村領ニ而御座候段申達候、

一、弟子中四人之面々一手合ニ而罷越、荒屋村
浜右仮小屋ニ而暫休足有之、此所より測量可
相初旨ニ付、磁石を立所々方位を被定候牋ニ
候得共、山々等何之尋茂無之候、此所に式間
斗之竹ニ紙ヲ付被相建、夫より金くさり被引
懸候に付、前ケ条勘解由殿江懸合之通、兼而
示合置申儀故、夫々申達候處、甚聞請不宜、
少腹立之様子ニも候得共、何分領より領迄被
打詰候義難相成、所々ニ而為測量と間数打立
被申候儀ニ指支も無之与押返申入候所、成程
其通り与申儀ニ付、段々付添步行仕候所、先
立之村役人江・領境其外諸村建通之町間等
程々被相尋候得共、何レ茂存不申段相答申候
所、弟子中被申聞候ハ、何を相尋候而も存知
不申段申聞、元來何村之役人ニ候哉与被相尋
候ニ付、私共ハ向栗ヶ崎村組合頭共ニ御座候
故、村々領境等委義存知不申段申達候、左候
ハ、是より罷帰り荒屋村肝煎差出候様被申
聞候ニ付、右肝煎中答ニハ、私共ハ為御縮方
上役より申渡ニ依而、郡中御先立仕儀ニ候間、
右等之儀、出役手代江御申談被成候様ニと申
達候ニ付、右應答手代共引取、向栗ヶ崎村組
合頭共此辺領境等可存様無御座、御用之品私
共江被仰聞候様ニと申達候所、今般之御用筋
共江被仰聞候様ニと申達候所、今般之御用筋

八、先達而公辺より被仰渡有之筈、猶又夜前
差出候先触二茂、村々内浜致案内候様申談候
義致披見候哉与申聞候二付、手代共、夫等之
趣急度致承知、御先触も拝見仕罷在候、併シ
只今茂被仰聞候通、村々領より領を被打ち間
数等御志らへ之儀二而茂無之候得者、放而其
村之領付之役人差出不申而者難成与申儀二
而茂有之間敷、尤村切役人罷出候而者、彼是
混雜仕義二付、重役之面々僉儀之上、差図を
以右之者共江為主付、当郡中御先立為仕申儀
二御座候間、何二而茂御尋之趣私共より可申
上、右之趣二而、荒屋村二不限領付役人呼立
申迄二も無御座候間、御用之品八私共江承り
可申与申達候得者、穿而尋茂無御座候、右先
立之役人八何之用二茂不相立儀、是より帰り
候得与噂被申候得共、不承付牀二而泊り所高
松村迄先立仕申候、

一、内潟村々被相尋候二付、村名八申達候、道
程被相尋候二付、道程八相知不申段申達候、
一、遠塚村領浦二而、此村山陰二湖水有之由、
何潟与手代共江被相尋候二付、蓮潟与申談申
達候、是より道程何程有之哉与被相尋候二付、
前々打ち申儀も無御座候故、存不申と手代共
相答候所、手前より被申候八、大抵廿丁も有
之哉与被申聞候二付、左様可有之哉与請流申
候、

一、夫より白尾村・内日角村・秋浜村等渚より
之道程被相尋候得共、町間打ち申儀も無之故
存知不申段申達候所、余遠々相見江申儀二而
も無之、纔々武丁か三丁斗二在之候村建之丁
間二候間、大図見江渡候所二而相答可申様被
申聞候得共、彼是請逃居候所、弟子中見込之

通三丁或八四丁も可有哉与申合候而、手帳記
被申候、

一、弟子中四人之手合二而者、荒屋村領・室村
領・大崎村・外日角村・木津村・高松村メ六
ヶ村領浦二而、磁石を立所々被見当候牀二、
手帳二被記申候、

一、右等之次第二而、浜辺通り二而者不機嫌之
牀二相見候得共、高松泊所江着之上八、一向
相替儀無之、隨分柔和二而、天文場所江茂手
代共罷出見申様被申聞候二付、不殘罷出夫々
道具等も見せ被申、甚首尾宜相成申候、

一、人足之儀、拾五人御郡境江指出置、測量手
伝人足二被取、其跡八道具等持運、且又三拾
五人荒屋村領屋所迄指出置、御用長持等為持
運申候、馬三足為相詰荷物附送り申候

一、勘解由殿高松泊所嶋屋市郎右衛門方へ、昨

四日九つ時頃被致着、弟子中八半時斗も後到

着二而、能州筋休泊之所之宿詰手代共江被相
尋候得共、能州筋之儀八国達之儀故、委細存
不申段申達候所、元来能州筋二而八手分も致
候段、先達而公辺より申渡も在之儀、旁以能
州筋八宮腰迄も聞合二罷越可申筈之所、未此
所も聞合二罷越不申儀難心得候、依而今浜村
役人罷越候様、飛脚を以申遣呼寄候様被申聞
候、別紙面相調飛脚指出候跡江、能州より
聞合之手代兩人罷越、勘解由殿江応対仕、

夫々相弁候様子二而、能州手代中八罷帰り申
候、

一、着之上七つ時頃 天文用場所、則宿市郎右

衛門背戸二而、四間四方位之間二筵為敷、板
図等も入用二無之旨二而、夫々被相持、夜二
入四つ時迄天文相済申候、

一、米直段・金直段被相尋候二付、米壺升二付
六拾式文、金八六拾三匁四分与申達候、

一、宿料之儀、勘解由殿木錢三拾五文、弟子中
等七人分拾七文宛二而百拾九文、飯米四升代
式百四拾八文、合四百式文被相払、尤請取之
儀、手前帳面二記被差出候二付、宿市郎右
衛門印形仕相渡申候、

一、式朱銀一件兩替仕度旨二而被相渡候、則代
錢八百拾六文相渡申候、

一、今五日朝六つ時迄念頃二挨拶在之出立被致
候、

一、昨四日高松村領内へ被立置候印竹之所二而、
磁石を被居、夫より又々一手合二而金くさり
を引、三ヶ所二磁石を立、所々山々被見当候
牀、此間二八何等之尋も一向無之、於御郡境
手代等江懸懸二挨拶在之、能州江被移申候、

一、通筋泊所等江之内、町立候所二而八箱を引、
丁間を知申儀有之様子二付、高松駅町内二而
右様之儀有之候者、急度及懸合為指止可申与
申談罷在之所、旅宿江被上候外町内通抜も不
被致、丁間并方位等被見取候様之儀も無御座
候、

右、今般為測量御用伊能勘解由殿巡回二付、於
道筋等主附御所村長次郎手代徳兵衛・清見村八
三郎手代庄七・南森下村金右衛門手代八郎兵
衛・北川尻村市十郎手代与三助等応答之趣書上
申候、以上、

亥七月五日

北川尻村 市十郎

御郡御奉行所

高松村 貞右衛門

御改作御奉行所

森村 藤蔵

白尾村 理右衛門

二、「新田家文書」口語訳文

「測量方の御役人伊能勘解由（忠敬）殿が、七月四日栗ヶ崎村を出立し、高松村の海辺通りを測量にいらっしゃるので、宿を用意し、測量の節は村内の浜通りを案内するように執りはからいなさい」との先触が、三日の夕方七つ時頃に向栗崎村へ到來しました。早速、配下の村々へ申し渡し、なお栗ヶ崎村へ出立の時刻などを問い合わせにやつたところ、「四日は二手に分かれる。勘解由殿は朝六つ時頃出立して、郡境の向栗ヶ崎村領を手初めに、荒屋村領までを測量する。弟子たちの一手は、晩七つ時頃出立し、荒屋村領を手初めに、高松村まで測量する」と、栗ヶ崎村役人まで申し入れてきたとのことでした。そこでつぶさに手配し、手代ども二人と先案内の村役人四人に人足十五人を添えて、四日朝、郡境へ出迎えさせたところ、弟子たち四人が六つ時頃郡境へおいでになりました。それぞれに挨拶をして、「これより河北郡でございます」と申し上げ、手代ども手分けして、一手を弟子隊に差し添えました。程なく勘解由殿もおいでになつたので、手代どもが丁寧に挨拶申し上げたところ、勘解由殿よりも「御苦労さまです」との挨拶がありましたので、「これより河北郡でございます」と申し上げて、付き添いました。

一、勘解由殿の一行は、郡境の向栗ヶ崎村領より金くさりのような物（鉄鎖）を引かせて来ましたので、手代より次のように申し入れました。

「お見受けしましたところ、金くさりのような物を引いておいでますが、この度は、御通り筋の村々で郡境より郡境までの町間（距離）、および村境より村境までの町間をお調べでしようか。もし郡内の町間をお定めにならるのでしたら、差し支えることがございますので、それはお止めください。」そう申し上げましたところ、「一向にそのような事ではありません。今回は測量御用のために巡回しているのです。測天量地と申して、地を量り天を測る所作のみです。勿論、国・郡または村々の領境より領境までの町間を調べるなどという事ではありません」と申し聞かされました。なお、「測量の件につきましては、先だって藩庁より仰せがあり、それぞれ御用に差し支えなきよう心得よと、重役の面々より厳重に申し渡しがありましたので、如何ようとも仰せの通りに心得て御用を勤めます。領境より領境までをずっと通しで測ることは成りませんが、所々で測量なさる段には差し支えはございません」と申し入れましたところ、「もつとも其の通りにいたします」とおつしやつて、金くさりは引かれましたが、荒屋村領までは磁石等を据えて山々方位などをご覧になるということはありませんでした。

一、同村浦にて、「今日の昼所の荒屋村というものは、渚からどれ程の道程ですか」とお尋ねになつたので、「町間（距離）はどれ程という覚えはございませんが、かなり隔つておりますので、海辺に仮小屋を建てて御昼所にこしらえ置きました」と申し上げました。

一、右記の外には村々の詳細についてのお尋ねもなく、勿論、村々の領境、高数、家数のことなど、いささかもお尋ねになることなく、ずっと付き添いました。荒屋村領の昼休所の仮小屋に着いたので、「ここでお休み下さい。昼食をお取りになりますか」と申し上げましたところ、お休みになりました。昼食は切飯、にしめ等で、一人前の弁当箱に入れて差し出しますと、「この渚の小屋といい、弁当も一人前ずつ別々にと差し出されたことといい、

ちを勤めます。御用の件は私どもへ仰せ下さいますように」と手代どもより申し上げて、付き添い歩行いたしました。本根布村・大根布村領の間では何のお尋ねもなく、宮坂村黒津舟の下で「ここまでも向栗ヶ崎村領ですか」とお尋ねになつたので、「この辺は宮坂村領でございます」と申し上げました。

甚だご丁寧の至りです。（江戸）出発以来、数ヶ国を巡致しましたが、かよくな御趣向は初めてのことと、感心致しました」などと、入念なご挨拶があり、その後、駕籠に乗られ、高松駅へ九つ時（正午）頃到着なさいました。

一、荒屋村領の仮小屋で昼食をとり出立なさる時、飯米代として錢二百文払われたので請け取りました。請け取り書はご自分の帳面に書き記して差し出されたので、荒屋村肝煎宇右衛門の名前で印形を記しました。

一、弟子四人の面々は一団となつてやつてきて、荒屋村の浜辺の仮小屋でしばらく休息されました。此所より測量を始める様子で、磁石を立て所々の方位を定めているようでした。が、山々など何のお尋ねもありませんでした。此所に二間ばかりの竹に紙を付けて立て、そこから金くさりを引き懸けましたので、かねて示し合せていました。前条で勘解由殿へ懸け合つた通りに、それぞれ申し上げたところ、甚だ聞き分け悪く、少しお腹立ちの様子でした。「何分にも領より領までをずっと通しで測ることはなりません。所々で測量のために間数を測られることは差し支えありません」と押し返して申し入れましたところ、「なる程その通りにしよう」と申されましたので、ずっと付き添つて歩行いたしました。先立ちの村役人へ領境や渚から村までの町間などをお尋ねになりましたが、いずれも「存じません」とお答えしたところ、弟子たちは「何を尋ねても、存じませんと申すが、

元来は何村の役人なのだ」とお尋ねになつたので、「私どもは向栗ヶ崎村の組合頭でござりますので、村々の領境など詳しいことは存じません」と申し上げました。「それならこれより帰つて荒屋村の肝煎を差し出しなさい」と申し付けられたので、右の肝煎たちは

「私どもは御縮（しまり）方として、上役よりの申し渡しによつて郡内の先立ちを勤めておりますので、右の件は出役の手代へお申し出下さい」と申し上げたので、右の応答を手代どもが引き取つて、続けました。「向栗

ヶ崎村の組合頭どもは此辺の領境など存じませんので、御用の件は私どもへ仰せ付け下さい」と申し上げたところ、「今般の御用筋については、先だつて公辺より仰せ渡されたはず。なおまた夜前に差し出した先触れにも、村内の浜辺を案内致すように申し入れたのだが、見たのか」と聞かれたので、手代どもは、「それらの趣意は確かに承知し、先触れも拝見致しました。しかし、ただ今も申し上げましたように、村々の領境より領境までを測つて間数などをお調べになるということではないので、その村の領付きの村役人を差し出さなくてはならないということでもないと判断いたしました。もつとも一村限りの村役人が次々に出てきて交替するとなると、あれこれ混雜いたします。それで、重役の面々が僉義の上、右の者どもに任せて当郡内の先立ちをさせましたので、何にてもお尋ねの趣は私どもより申し上げます。右の趣意ですでの、荒屋村に限らず領付きの村役人を呼び立て申すまでもございません。御用の件は

私どもが承ります」と申し上げれば、それ以上のお尋ねもありませんでした。「それならば先立ちの村役人は何の役にも立たないので、これより帰れ」などと言われましたが、聞かぬ振りをして宿泊所の高松村まで先立ちました。

一、内湯の村々についてお尋ねになつたので、村名は申し上げました。道程を尋ねられたので、「道程は存じません。」と申し上げました。

一、遠塚村領の浦で「この村の山陰に湖水があるらしいが、何湯というのか」と、手代どもへお尋ねになつたので「蓮湯です」と申し上げました。「ここより道程はどれ程あるか」とお尋ねになつたので、「前々より測つたところ、ご自分より「およそ二丁もある」ともないので、存じません」と手代どもが答えたところ、「自分より「およそ二丁もあるか」とお聞きになつたので、「それくらいでしようか」と聞き流しておきました。

一、それより白尾村・内日角村・秋浜村などの渚からの道程を尋ねられましたが、「町間を測つたこともないでの存じません」と申し上げますと、「そんなに遠くに見えるようでもなく、わずか二丁か三丁ばかりの村建の町間だから、おおよそ見えるところで答えるように」と申されました。が、あれこれ請け逃げしていると、弟子たちは「見込みの通り三丁、あるいは四丁もあるだろうか」と申し合わせて、手帳に記していました。

一、弟子たち四人の一行は、荒屋村・室村・大崎村・外日角村・木津村・高松村の計六ヶ村領の浦で、磁石を立て所々を見ている様子で、何か手帳に記していました。

一、右のような次第にて、浜辺通りでは不機嫌の様子に見えましたが、高松の宿泊所へ着くと、一向に変わった様子もなく、随分と柔軟になられ、手代どもへも天文場所へ出てきて見学するように申されましたので、みな残らず出て、夫々の道具等も見せていただき、甚だ首尾よくなりました。

一、人足の件は、十五人を郡境へ差し出して置きました。測量手伝い人足に取られ、残りは道具などの持ち運びを致しました。さらに三十五人を荒屋村領の昼所まで差し出して、御用長持ちなどを持ち運ばせました。また、馬三疋を用意し、荷物を付けて送りました。

一、米の値段・金の値段をお尋ねになつたので、米一升に付き六十二文、金は六十三匁四分と申し上げました。

一、宿料の件は、勘解由殿の木銭三十五文、弟子たち七人分は十七文宛で百十九文、飯米四升代として二百四十八文、合計四百二文を支払われ、請け取りは、手前の帳面に記して差し出されたので、宿市郎右衛門が印形をして渡しました。

一、二朱銀一枚両替したいと渡されたので、代金八百十六文を渡しました。

一、昨日七月五日、朝六つ時まで懇ろにご挨拶されて出立なさいました。

呼びなさい」と申されました。そこで、別紙面をしつらえて飛脚を遣わした後へ、能州より問い合わせの手代二人が参りました。勘解由殿に對面して、いろいろ話し合つた様子で、能州の手代たちは帰りました。

一、高松村に到着後、七つ時頃から、天文（観測）用の場所、即ち宿泊所市郎右衛門宅の背戸に、四間四方くらいの間に蓬を敷かせ、板囲等は不用ということで、道具を設置し、夜に入つて四つ時迄、天文（観測）をなさいました。

さりを引き、三ヶ所に磁石を立て、所々の山々を見ている様子でしたが、この間には何等のお尋ねも一向になく、郡境で手代等へ懇意にご挨拶をして能州へお移りになりました。一、お通り筋の宿泊地などで、町立の所では箱（量程車）を引いて町間を測ることがあるというので、高松駅町内で右の様なことがあつたら、きっと懸け合つて指し止めようと相談していましたが、旅宿へ上られた外は、町内を通り抜けることもせず、町間や方位等をお調べになるようなことはございませんでした。

右、今般測量御用のため伊能勘解由殿巡行に付き、道筋等での主附（責任者）である御所村長次郎の手代徳兵衛、清見村八三郎の手代庄七、南森下村金右衛門の手代八郎兵衛、北川尻村市十郎の手代与三助等より応答の趣を書き上げました。以上。

亥 七月五日	北川尻村	市十郎
御郡御奉行所	高松村	貞右衛門
御改作御奉行所	森村	藤 藏
白尾村	理右衛門	

伊能忠敬 周辺の人⑧

佐藤一斎 前田幸子



家老の子

※年齢は数え年

佐藤一斎（一七七二—一八五九）は江戸後期（現・中央区日本橋）の美濃国岩村藩邸で生まれた。伊能忠敬より二十七歳年少である。一斎の父・佐藤信由は美濃岩村藩（三万石）の家老、母・留は下総国関宿藩の家老・蒔田助之進の娘だつた。長男は夭折していたが、二男の一斎がまだ幼年のため婿養子が家を継いだ。一斎は岩村には五十歳のときに旅行で訪れただけで、生涯のほとんどを江戸で過ごし、江戸で没した。はじめ諱を信行、通称を幾久藏と称したが、のち諱を坦、通称を捨藏と改めた。号は愛日楼など。一斎は後年に称した号であるが、本稿では便宜上、すべて「一斎」と表記する。

藩主の子

林述斎 谷文晁画
東京国立博物館提供

浜町の岩村藩邸には藩主の子・松平乗衡がいた。後年の林述斎（一七六八—一八四一）である。松平乗蘊の三男として生まれ、一斎より四歳年長だつた。諱ははじめ乗衡、のちに衡（たいら）、述斎と号した（以下、本稿では述斎と表記する）。述斎も兄一人が夭折したが、病弱のため他家から来た養子が家を継いだ。述斎と一斎は主従だったが、「兄弟のようなもの」（述斎の言葉）として相親しみ、毎日のように行き来して勉強をする学友でもあつた。述斎が林大学頭となつてからは、師弟ともなつた。二人は七十年にわたり「形に影が添うが如き」（一斎の言葉）人生を送つた。

士籍離脱

一斎は幼時から聰明で読書を好み、多芸多才で十二、三歳すでに成人のようだつたという。また拳法や柔術を習い、豪放をもつて自任した。放蕩無賴の行いもあつたが、十八歳で『古文孝経解意補義』を著し、十九歳で藩主の近侍となつた。順調な人生が開けるはずであつた。

しかし一斎が二十歳の時、ある出来事が原因で武士をやめることとなつた。『岩村藩士歴世略譜』には「幾久藏、不埒之れあり。治助（義兄・佐藤信久）より相願い、永の御暇」とある。「不埒」の内容は不詳だが、それについては、次のような逸話が伝えられている。

墨田川事件

※現・隅田川

「ある日、一斎が同藩の友人と墨田川で舟遊びをしていたところ、友人が誤つて川に落ち溺死した。一斎は独りでは藩に帰れなくなり、そのまま江戸を出奔した。」（『佐藤一斎と其門人』）また、門人兼家僕だった西村尚軒の話として、「翁の若年の事として聞いたのだが、二十歳の頃、墨田川で舟遊びをしていると、三崎御崎から將軍家献上の鰐船が押切り櫓（絶えず櫓を押して船を進める）で入つて來た。とつさのことで避ける暇がなく、衝突してこちらの船が沈没、同船の女子が溺死した。このことで近侍を免じられた。」（『南学史』）

前の話の「同藩の友人」というのが後の話の「同船の女子」と同一人物であるかどうかは不明だが、いずれこの舟遊びの際の事故が免職の原因だつたと推察される。事件が起きたのは寛政三年八月のこと。十月に士籍を離脱した。

大坂遊学

武士をやめた一斎は、ほかに道もない学習者にならうと決意した。述斎の勧めにしたがつて翌寛政四年（一七九二）二月、独歩で大坂に赴き、間重富宅に寄寓して懐徳堂の中井竹山に師事した。間重富は当時三十七歳、寛政七年に改暦御用で出府する三年前のことであった。

懐徳堂は享保九年に町人の出資によつて建てられた郷学校で、幕府の官許を得て大坂の学問所となつていていた。漢学塾であるが、脱藩した麻田剛立（寛政四年当時五十九歳）が旧知の中井竹山を頼つて身を寄せ、天文学や医学の最新知識をもたらしていた。特に竹山の弟・中井履軒は麻田流天文学に深い関心をもち、自らも天文学に関する書を著した。また、懐徳堂の門人山片蟠桃も影響を受け、著書『夢の代』の巻頭「天文第一」で宇宙論を展開している。



「中井履軒肖像画」
大阪大学懐徳堂文庫蔵



「中井竹山肖像画」
大阪大学懐徳堂文庫蔵

捨藏と改名

この大坂遊学の年、二十一歳のとき、一斎は諱を信行から坦（たいら）に、通称を幾久藏から捨藏に改めた。以後は儒者「佐藤捨藏」として世に知られ、また当時の慣習で、単に「捨藏」とも呼ばれた。ちなみに、忠敬の『江戸日記』は文化十四年五月一日をもつて「捨藏」を「一斎」に変更している。その時期、四十六歳で「一斎」の号を使い始めたと推定される。

林大学頭に入門

江戸に戻った一斎は、翌寛政五年（一七九三）二月に林大学頭に入門した。林家は林羅山（一五八三—一六五七）が徳川家康に登用されて以来、代々将軍の侍講として朱子学を講じ、聖堂の祭酒職と大学頭の官名を世襲してきた。忠敬が十七歳の時、五代目の大学頭林鳳谷（一七二一—一七七四）に入門したことは周知の通りである。一斎が入門したときの大学頭は七代目の林錦峰（一七六七—一七九三）であったが、入門わずか二ヶ月後の四月、二十六歳の若さで病没した。錦峰には嗣子がなかつたため、幕府は美濃岩村藩の公子であった述斎（当時二十六歳）に命じて林家八代目を継がせた。一斎は林錦峰に入門して湯島聖堂の学舎で暮らしていったが、述斎が大学頭になつたので、そのまま述斎の門人となつた。師弟となつた二人は以前と同様、日夜一緒に学問に励んだという。

昌平坂学問所開設

寛政二年、老中松平定信は「寛政の改革」の一環として林家に「異学の禁」を通達し、朱子

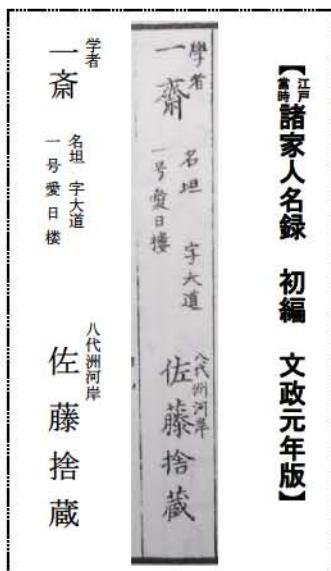
逸話一 この大坂遊学の帰途のことでもあろうか、一斎が東海道で雲助（駕籠かき）をしていたといふ逸話がある。江戸に帰る途中の長崎奉行が、雲助の中に只者ではない異風を漂わせている者がいるのを見咎め、きわめて顔色が青い（一斎は「青鬼」と言っていた）ことから、「君は佐藤君であろう」と問い合わせると、「そうだ」と答えて少しも恥じるところがなかつたという。

逸話二 一斎は大坂滞在中に京都に赴いて門下三千人といわれた儒者・皆川淇園（一七三四—一八〇七）を訪ねた。その際に淇園の娘が一斎の美貌に思いを寄せ、ある夜、ひそかに書を一斎の座右に投じた。翌日一斎がそれを淇園に示したところ、淇園が驚いて娘を叱責したので、娘は井戸に身を投じて死んだという。事実かどうかは不明だが、一斎の若い時期に女性の死にかかる逸話が二件あつたことになる。

林家の家塾
林家の私塾だった
聖堂が官立の学問所
となつたことにより、
湯島の家塾は廃止と
なつた。ただし、別
の場所に移転して存
続していく、文化二



湯島聖堂の入徳門



昌平塾は主に旗本の子弟の教育を目的とし、通学の者もいたが、寄宿舎（定員三十名）もあって官費でまかなわれた。これとは別に書生寮（南寮・北寮）があり、ここには諸藩からの俊秀が給費生として入寮した。生徒は藩の代表としてお互い競い合つたので、優秀な人材が輩出した。寮は陪臣、浪人、庶人も受け入れた。生徒達は自治制で暮らしていたが、寄宿舎と書生寮は交渉がなかつた。寄宿舎、書生寮とも定員が少なかつたので、入りきれない生徒は昌平塾儒官の門人となつて待機した。**また**林家の塾に入りきらない生徒は一斎の私塾で受け入れた。

学問所は明治維新までの七十年間、官立の大学として文教センターの役割を果たした。なお湯島の聖堂建築のうち、「入徳門」は数度の火災を免れ、宝永元年（一七〇四）に建てられた忠敬入門当時のものが現在も残つてゐる。

学の振興をはかつたが、述斎の大学頭就任以降はますます積極的に文教改革を進めた。寛政九年（一七九七）には述斎の建議により、林家の私塾だった聖堂を林家から切り離し、幕府直轄の学問所として整備拡張、昌平坂学問所（通称・昌平塾）を開設した。

昌平塾は主に旗本の子弟の教育を目的とし、通学の者もいたが、寄宿舎（定員三十名）もあって官費でまかなわれた。これとは別に書生寮（南寮・北寮）があり、ここには諸藩からの俊秀が給費生として入寮した。生徒は藩の代表としてお互い競い合つたので、優秀な人材が輩出した。寮は陪臣、浪人、庶人も受け入れた。生徒達は自治制で暮らしていたが、寄宿舎と書生

寮は交渉がなかつた。寄宿舎、書生寮とも定員が少なかつたので、入りきれない生徒は昌平塾儒官の門人となつて待機した。**また**林家の塾に入りきらない生徒は一斎の私塾で受け入れた。忠敬と一斎の交際は『江戸日記』では文化四年の年札が最初である。尤も『江戸日記』は文化三年十一月から始まるから、それ以前のことには分からぬ。以降、文化六年正月まで忠敬は一斎宅に時候の挨拶回りをしている。資料がないが、息子の秀藏（当時二十代前半）や内弟子の尾形敬助（同）が一斎に入門していたのではなかくと思われる。その後、文化七年から文化十二年までの間は一斎の名は『江戸日記』にあ

る。忠敬と一斎の交際は『江戸日記』では文化四年の年札が最初である。尤も『江戸日記』は文化三年十一月から始まるから、それ以前のことには分からぬ。以降、文化六年正月まで忠敬は一斎宅に時候の挨拶回りをしている。資料がないが、息子の秀藏（当時二十代前半）や内弟子の尾形敬助（同）が一斎に入門していたのではなかくと思われる。その後、文化七年から文化十二年までの間は一斎の名は『江戸日記』にあ

太田錦城

一斎への訪問が途切れたこの期間に交際が始まつたのが太田錦城である。内弟子・尾形敬助が錦城に師事していたことが書簡で知られる。この人物について、次頁に資料を掲げた。



<江戸城馬場先門付近>八代洲河岸と大名小路

いう、儒者としては型破りの人物だった。独自の学説を立てて人気を博し、三河吉田侯（当時の老中首座・松平信明）に招聘されて藩儒となつた。文化八年頃のことだという。

その文化八年の十一月三日の『江戸日記』に、「太田才助、近藤重蔵へ立寄る」と、錦城が初めて登場する。以後、文化十三年まで、錦城宅

『懷宝日札』小宮山楓軒

(水戸藩の儒者)

世には思いもよらないことを聞くものだ。或る大儒(名は言わない。氏は太田)と呼ばれる人で、言うまでもなく経義に通じ、文学に達して並ぶ者がいないという。しかし講釈をするときはいつもあぐらをかき、くわえ煙管でめつたに正座などすることはなく、平常袴を着ることもない。もし袴を着るときには、前垂(前掛け、エプロン)にひだのあるものを前だけ着けて、後ろは無し。子供六人、いずれも若盛りで、父の風儀によく似て学術文章には長じているものの、行状は少しも取り柄がなく、夏は皆裸体で衣類など着ることがない。親の前でも憚らず、時には足を出して居ることもあるという。殊に甚だしいのは、一人の子は父の妾を誘い出して還らず、しかしその後も、この子を許してまた同居するなど、人倫の道とも思えない。で

その儒者が窮めた経義というものは、一体

太田才助と佐々木丹蔵(もと加賀の博徒。理財の才で家老に出世した)の兩人は召捕えられたという。才助は加賀者で躋壽館(多紀氏が開設した医学館)に居て講義をしながら博奕も行い、その上、去年盜みをして出奔した由。それが戻つて来て又々講義に出ていたとか。丹蔵も至極の悪者で以前は水戸様の御医師だったが、現在は水戸様から江戸徘徊を禁止されている。そんな者どもを儒者と申して講師に出すのは安長(幕医・多紀桂山。躋壽館教官。大田錦城を支援した)がよくよく悪いとのこと。そもそも安長は学問好きだが、とかく奇説に走り、口先が巧い者を良しとするそうだ。才助は去年も『疑学弁』という書を著わして朱子学を非難したとか。(中略) むやみやたらに新奇を好むのは可笑しなことだという話だ。

【伊能忠敬より大川治兵衛宛書簡】

頸二郎(尾形敬助)、子年(文化元年)浪人以来、学問にだけは精を出し、余程上達しました。そのため自分でも高慢になり、未明から朝にかけ、又昼夜七ツ頃から夜にかけ、寸暇を惜しんで勉学にいそしんでおりますが、地図の手伝いは怠けがちで、時々病気もしますし、先年のように精を出しません。(中略) 頸二郎も昨冬薬研堀の師匠・太田へ金五両用立て、香取へ金一両二分、彼女へ手切金二両二分渡し、その外に師匠へ五節句にまた小遣等やらで、余程渡しあげ酒のせいでもなかろうに、前述の次第は俗にいう「あきれはてた」というものである。

『よしの冊子』水野為長(松平定信の部下)

太田才助と佐々木丹蔵(もと加賀の博徒。理

財の才で家老に出世した)の兩人は召捕えられたという。才助は加賀者で躋壽館(多紀氏が開設した医学館)に居て講義をしながら博奕も行い、その上、去年盜みをして出奔した由。それが戻つて来て又々講義に出ていたとか。丹蔵も至極の悪者で以前は水戸様の御医師だったが、

【太田錦城より尾形敬助宛書簡】

毎度御手紙を下され忝く思います。さて去る冬より学業が大流行して一日も暇がなく、一向に学問することもできずに私の学問はますます荒廃しております。教授するのをやめましたら、かくの如き大流行で、さてさて困り入つております。これも天命ですから、まずは奔走しておりますが、このところの大暑で病身ゆえ大いに困つております。あなたはご壮健のこととお察しします。(中略) 『鄭註孝經』(窪木清淵の著書。忠敬が序文を書いた)四冊、忝く存じ奉ります。この本はとてもよく、ご考究も至つてよろしいと存じます。皆が感心して奪うよう持ち去るものですから小生のところには一冊も残らず、これまた大困りです。窪木先生にくれぐれも宜しく御伝言下さい。(以下略)

六月二日

太田才佐

元貞

尾形敬助様

去年の暮から錢は一錢も無いのですが、一向に困ることがなく、これまでの赤貧とは違つていま

す。これも一大奇事ですのでお知らせします。

(『房総郷土研究』第七卷第五号「名家書簡集」)

と同方角だつた近藤重藏宅、秋山松之丞（奥祐筆）宅の三軒をいつも同時に回つてゐる。忠

敬が錦城の学問に賛同していなかどうかは不明だが、挨拶は欠かさない間柄だつた。

尾形敬助（※謙次郎、頭二郎、他、通称多数）

資料から推察すると、内弟子・尾形敬助は錦城に傾倒していたようである。自分の給料の中から錦城に五両を用立て、その外に五節句ごとに小遣いも渡していたという（忠敬書簡）。しかし錦城から敬助あての手紙は、礼状の体裁をとりながら、暗に金銭を無心するような内容になつてゐる（錦城書簡）。忠敬は敬助が「一文無しの貧乏学究」になつてしまふのではと心配し、また儒学を学んで聖人君子に近づくどころか、逆に「学問をするほど人が悪くなる」（忠

敬書簡）と嘆いてゐる。

尾形敬助は文化五年から文化八年まで測量行を断つて、学問に没頭していいた時期があつた。また、まだ幼くてわけもわからない忠誨に自分の趣味で毎晩論語の講釈を聞かせていたという逸話もある。錦城のようにな一家を立てて学者になりたかつたのだろう。しかし、結局は学問を諦め、文化十二年に神楽坂の渡辺氏の養子に入り、普請役となつた。

ちなみに錦城の三男・太田魯三郎が文化十二年六月末に忠敬宅を訪れ、七月一日には敬助と浅草三間丁に出かけている。敬助が養子に行く直前の時期である。敬助と親しかつたようだが、この三男も父に似て行状に取り柄がないと評されている。

忠誨の入門

六年の空白期間を経て文化十三年十一月、一

斎の名が『江戸日記』に復活する。忠敬は孫の忠誨の入門依頼で久々に一斎を訪れた。

忠敬は非常に教育熱心で、文化十二年の『江戸日記』には花形東秀と玉江文藏という、いずれも筆道家として著名な手習師匠が忠誨の師として登場している。手習いを終え、本格的に学問させるにあたり、忠敬は一斎を選び、金五十疋を渡して翌年の入門を依頼した。

「三治郎を来月佐藤捨蔵へ預けたいと思ひます。三治郎はとても私の手には余る子です。よくよく三治郎はむつかしい子で哲之助とは大違い：例え佐藤への入門で費用がかかる：よくよく三治郎はむつかしい子で哲之助と長じ、考拠精密、みずから一家の学を建てた。吉田侯・加賀侯に仕え、文政八年六十一歳で没した。

（未公開書簡集B-5）

書簡で忠敬は、「我が手に余る、むつかしき子」である忠誨の教育を、たとえお金がかかるとも、生活費を削つてでも、という決意で忠誨を一斎に託そうとした。翌文化十四年、十二歳になつた忠誨は一斎に入門し、塾内に引越し。忠敬は内入金として三百疋を納め、松平能登守様内（岩村藩家中）の又市殿という人物にも入門金として二朱を渡している。忠敬は忠誨のためにあれこれ骨を折り、お金も使つた。しかし入門からわずか二か月後の六月、何か問題が起きたらしく、忠誨は塾を出て（出されて）家に引取られた。それ以降、忠敬は林大学頭へは挨拶に行つても一斎方へは行かなくなり、そのまま数か月後に亡くなつた。忠敬にとつて一斎は個人的、心情的つながりというよりは、学校の教育者と生徒の保護者、という関係だったようである。

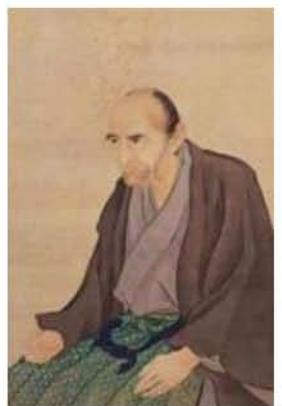
その後の話であるが、『忠誨日記』によると、忠誨は十五歳のときに一斎に再入門し、一斎を通じて林大学頭に「忠誨」という実名をいただいた。一斎に林大学頭に入門したい旨、相談したが、年齢が不足だと断られている。以後、日記には「予、佐藤へ行く」が頻出するから、眞面目に佐藤塾に通学していたようである。文政四年六月には、一斎に「七月に美濃の方へ行くので小遠鏡のよく見えるのを借りたい」と頼まれ、小目鏡を持参したという記述がみえる。時期からみて、一斎が美濃、岩村へ旅行した際の話であろう。一斎は何を見る目的だったのか、ご両人御決心下さい。これは大切なことです」



佐藤一斎像（88歳）
石丸師曾画
東京国立博物館提供



佐藤一斎夫妻像（80歳）
椿椿山画
東京国立博物館提供



佐藤一斎夫妻像（71歳）
椿椿山画
東京国立博物館提供



佐藤一斎像（50歳）
渡辺華山画
東京国立博物館提供

忠敬の墓碑文

忠敬と一斎の重要な接点の一つが墓碑文である。一斎は忠誨の依頼により、忠敬の墓碑文を執筆した。この碑文は伊能忠敬についての最初の伝記とも言われ、忠敬に関する基本的な史料の一つとなっている。その原文は『伊能東河墓碣銘』という表題で『愛日樓文集卷十九』に収められているが、これを現在源空寺に建つてある墓の碑文『東河伊能君墓銘并叙』と比べてみると、かなりの異同がある。『愛日樓』所載の原文は「源空寺」碑文より長文で、かつ表現が具体的である。例えば忠敬の死因について、源空寺の碑文が「文政元年齢七十有四罹病其四月十三日劇殆不起」としているところ、「愛日樓」のほうは「罹病」を「疾疢」、すなわち熱病だつたとしている。また「愛日樓」のほうには「齡踰七旬鬢霜皤然被肩而其意氣蓬勃如少壯人（七十歳を超えてしらがの鬢が肩を覆ついていても、意氣盛んで若者のようだつた）」という文章除がり、忠敬が晩年、鬢を結わずに總髪にしていたことがわかる。しかし、この文章は削除された。一斎の原文は添削・編集されて源空寺の碑文になつたと考えられる。

『忠誨日記』（文政五年十二月三十日）では「碑文が出来た」という知らせが高橋景保から来ている。一斎の文章除を添削できる立場にあつた人物は、忠敬を熟知し、かつ御書物奉行の地位にあつた景保以外には思い当たらない。碑文を仕上げたのは景保ではないだろうか。

なお、一斎はこの年、間重富（一八一六年没）、馬場佐十郎（一八二三年没）の墓碑文も書いている。司天台関係者三人の墓碑文が同時期に成

蛮社の獄

一斎の門下からは渡辺華山をはじめ、佐久間象山、横井小楠、山田方谷らの学者、思想家が輩出した。一斎は後世に大儒と評されるが、いくつかの批判も免れない。そのうち最も知られているのが、天保十年（一八三九）に起きた「蛮社の獄」の際に、「門弟の渡辺華山を見殺しにした」といわれる逸話である。

実はこの事件は忠敬の門人が発端になつて

いるので、まずそのことから紹介したい。

この事件は、鳥居耀蔵と江川太郎左衛門英龍が江戸湾測量を命じられたことから始まる。鳥居が起用した測量師がお粗末きわまりなかつたので、江川が独自に別の測量師を同行した。これを鳥居側の測量師が憤り、鳥居に讒言したため大事に発展したという。この江川側の測量師というのが奥村喜三郎という伊能忠敬の門人と内田弥太郎（五觀）であった。

奥村喜三郎

奥村喜三郎（？—？）は文化十二年（一八一五）に伊能忠敬に入門し、『江戸日記』には「奥村喜三郎来る」と計十四回、『忠誨日記』にも文政五年（一八二二）に「奥村喜三郎來たる」と二回登場している。高野長英『蛮社遭厄小記』によると、奥村は増上寺御靈屋領代官という職にあり、暦算、数学に通じていた。また、内田

立したことも景保の関与によると思われるが、詳細は不明である。なお、墓碑文については稿末の資料を参照されたい。（資料一）・『愛日樓全集』（墓碑文）（資料二）・『東岡伊能君墓』（墓碑文）

弥太郎（五觀）とともに經緯儀を考案し、天保九年の「尚齒会」に参加した。著書に『經緯儀用法図説』がある。「蛮社の獄」でその後も奥村は無人島を外国に売り渡す陰謀に加担したという無実の罪で弾圧をうけた。

この事件は、弾圧した側が鳥居耀蔵（林述斎の子）、渋川六蔵（渋川景佑の子）、弾圧された側が渡辺峯山（一斎門人）、江川太郎左衛門英龍（忠敬門人・英毅の子）と、当事者双方に一斎や忠敬の関係者がかかわっている。一斎の同僚である松崎廉堂は、水野忠邦に上書して渡辺

峯山を死罪から救つたが、一斎は行動を起こさなかつたとして批判される。しかし、鳥居は述斎の子であり、一斎が敵対するわけにはいかない事情があつたとも言われる。

ちなみに、江川英龍の江戸湾の測量には間宮林蔵も援助したという。江川英毅と天文方とのつながりから江川家と間宮林蔵は交流があり、江川家には「蛮社の獄」や「シーボルト事件」に関する間宮林蔵の書状が三通現存していることである。（資料三・『伊豆新聞』）

晩年と墓所

一斎は永年にわたり林家（私塾）の塾長を勤め、天保十二年（一八四二）林述斎の死去に伴つて七十歳ではじめて昌平黌の儒官（幕臣）となつた。将軍や諸侯に講義をしたのはこれ以後のことである。八十二歳で布衣（御目見以上）となつた。その門人は三千人と言われ、門人以外にも吉田松陰、西郷隆盛らのように特に幕末維新期において著書から影響を受けた者は数多くいたと言われる。

【参考文献】

- 『伊能忠敬 江戸日記』 伊能忠敬研究会
- 『伊能忠敬未公開書簡集』 //
- 『伊能忠誨日記』会報32・39号 佐久間 //
- 『伊能忠敬研究』第52号 安藤由紀子 //
- 『伊能忠敬書状 千葉県史料 近世篇』千葉県

一斎は講義上手で知られたが、晩年はぼけて、論語を講じるにも紙をめくるのを忘れて同じ箇所を幾遍もくり返し、しかしその繰り返すのに一言半句も間違えないことには皆驚いたといふ有名な逸話がある。

安政六年（一八五九）九月二十四日夜、昌平坂の官舎で八十八歳で没し、城南麻布郷（現・港区六本木）高明山深広寺の佐藤家の墓所に葬られた。墓は一般公開されていない。

おわりに

佐藤一斎は、現代においてもなおその著書が広く読み継がれ、特に「言志四録」は多種多様な副題つきで、数社の出版社から刊行されている。江戸時代の儒学者が現代社会に受け入れられ、活躍している稀有な例ではないだろうか。

一斎の人生は「青春の蹉跎」が尾を引いて、意外にも苦労が多かったようである。学者、思想家、教育者であつたが、同時に塾長という管理職を長くつとめた。そのような人生経験から抽出されたエッセンスが一斎の思想の中に溶け込み、時代を超えて人々の共感を誘うのである。

また、冒頭の『言志晚録』第六〇条に見える一斎の詩文家としての資質も、読む人を魅了してやまない理由の一つではないかと思う。

（了）

余話 第八次測量出立

文化八年（一八一一）十一月二十五日、忠敬は第八次測量（九州第二次）に出立した。前日、忠敬は近藤重蔵や太田錦城宅に挨拶に寄っている。彼らから励ましの言葉を受けたであろう。忠敬の全国測量は交友関係によつても支えられていたのではないかと思う。

ちなみに、出立の日、『江戸日記』には記載がないが『測量日記』を見ると間宮林蔵が見送りに来ている。この頃、忠敬は林蔵に『贈間宮倫宗序』を与えていたが、その文中に「今余職量地將赴九州（今、私は測量のため九州へ行こうとしている）」という文言がある。忠敬は実際に、今、九州へ旅立つというこの朝に、『贈間宮倫宗序』を林蔵に渡したと思われる。日記を見るかぎり、手渡すとしたら、その機会はこの日以外にはないからである。

『聖堂物語』『昌平黌物語』鈴木三八男斯文会
『佐藤一斎・大塩中斎』 相良亨 岩波書店
『佐藤一斎と其門人』 高瀬代次郎 南陽堂
『南学史』 寺石正路 富山房
『補正・佐藤一斎先生年譜』田中佩刀 明治大
『岩村町史』「岩村藩 藩士世略譜」 岩村町
『懐宝日札』「隨筆百花苑」三巻 中央公論社
『よしの冊子』「隨筆百花苑」八・九巻 //

『蛮社遭厄小記』 高野長英 //
『懐徳堂 浪華の学問所』（財）懐徳堂記念会
『伊豆新聞』「江川家の至宝」平成26年5月18日、

『伊能東河墓碣銘』原文と読み下し文

前田幸子

伊能東河墓碣銘

君、諱は忠敬、字は子齊、伊能氏、東河と号し三郎右衛門と称し、晩くには勘解由と称す。北總香取郡佐原村の人なり。本姓は神保氏、南總武射郡小堤村の神保貞恒の第三子にして出でて伊能氏を冒す。伊能氏は世、閭の右族たり。大同中、諱、景能なる者あり、北總香取郡大須賀莊を知め、伊能村に居し因つて以て氏とす。子孫蟬聯（蟬声のように絶えず続く）、其地を占む。永禄中に至り、諱、景久なる者有り。始めて佐原に徒る。天正中、居民となり肆慶（商店）を開き貿易す。實に君が九世の祖なり。高祖は諱、景利、曾祖は諱、昌雄、祖は諱、景慶、考は諱、長由、胤無く其の配神保氏は君の従祖姑なり。因つて君を以て嗣と為す。長由、蚤（つと）に歿し、産、頗る荒る。君、既に來り嗣ぐ。慨然として幹蠱（家業を繼いでよく果たす）を以て志と為し、昕夕黽勉（朝晩つとめ励み）、儉素を守り、奢靡を去る。家衆百口、躬を以て率先す。産、稍々復す。天明三年、関東大いに饑う。君、為に私儲を發し閭里に賑貸（無利子の貸付）す。施し旁近の村落に及び全活する所多し。六年、又、饑う。これを賙（すく）うこと初めの如し。君嘗て星曆之学を好む。其の従事に肆力するを欲するや久し。家道未だ復さざる故を以て因循すること数年、寛政六年に至りて決然産を子景敬に委ね身独り都に來り僑居す。偏く曆家を訪ね疑義を擧げてこれを叩問するも竟に未だ釋然とせず。高橋君東岡に見るに及び、始めて西洋の曆法を聞く。理精しく數密かにして諸家に超越す。是に於いて宿疑渙然と冰釋し、遂に舊学を棄てこれを学び發明する所多し。東岡の門、蓋し人に乏しからずも、推步測量の精、則ち獨り君を推すと云う。寛政十二年庚申閏四月、官命君測量北陸道及蝦夷地方東南沿海以定地度明年正月、官賜君鑿字銀各十錠、許姓刀、賞天明年内兩赦窮饑也。享和元年三月、命測量伊豆相模二總常陸奥沿海六月又、命測量出羽三越佐渡能登駿河遠江參河尾張沿海至文化紀元集地方各國為一圖、迄至其九月、賞賜廉朱擢為徵手屬日官既而又命測量山陽山陰西海南海四道壹岐對馬官道及沿海十二年又、命測量伊豆七島及箱

廩米を賞賜し擢んでて散手と為し日官に属せしむ。既にして又、山陽、山陰、西海、南海の四道と、壱岐、対馬の官道及び沿海を測量することを命ず。尋で江都府内を測量し、十四年四月、府内畠成り進呈す。寛政庚申より此に至る十八年を閑し、五畿七道、遐陬僻壤、地として涉らざるなく、全く測量してこれを畠記す。後、復た命有りて寓内輿地全圖、及び度數譜、行程記を修定す。文政元年に至り、齡七十又四、疾（熱病）を疾み其の四月十三日、亟（きわま）りて殆ど起たず。四年七月に至り輿地全圖及び譜記成り進呈し、其の九月四日を以て歿す。官、其の功を追賞し、孫忠誨に厚く賚（たま）い以てこれを旌せり。君、稟賦朴直にして精力人に過絶す。齡七旬を踰え、鬢霜皤然として肩を被ふも其の意氣蓬勃として少壯の人の如し。測量の命下る毎に輒ち喜び顔色に見し、不日にして發す。乃ち躬ら險阻を歴え海濤を凌ぎ奔走すること數十百里、風雨寒暑、未だ嘗て少しも沮喪せず。噫嘻（ああ）何ぞ其の氣の豪にして事の勤なるや。著す所、國郡晝夜時刻、對數表紀源術、并用法、求割圓八線法、割圓八線表紀源法、地球測遠術問答凡そ若干卷有り、家に在りて藏す。君、先閨長由の女、繼配桑原氏、皆、先んず。三男二女を得、昆季並びて殤す。仲子景敬家を督るも又、世を蚤くす。孫忠誨承重す。墓は淺草源空寺の東岡君の塋側に在り。遺託を以てなり。君嘗て忠誨を余に従ひて游ばしむ。忠誨、才、敏にして箕業（父祖の業）行ふに將に有望たらんとす。乃者、其の世系履歴を件繋し、余に墓門の銘を譲せんことを丐う。嗚呼余の文、豈に以て不朽の君に足らんや。然りと雖も其の請、倦々として徇わざるべからざるなり。乃ちこれを歴叙し、係るに銘四章、大書せしむるを以てし、深くこれを刻せん。其の一に曰く、天の闇（暗）を叩き、地の輿を極む。瘴烟毒霧、瘡を為す能わず、祁寒暑雨、癪を爲す能わず。乃ちかくの如き人、罕に其の儔を見る。其の二に曰く、維れ昔、夏后（禹）四陲を遍く跡み、泥に櫛（そり）、山に楓（かんじき）、手に胼（まめ）、足に胝（たこ）、外にあること八年、日に孜々たらんことを思う。百世の下（後）、維れ君これに似たり。其三に曰く、表を樹て線を縦横に亘し、遠近（近）広表を歩算す。靡或、毫舛、保章、分野、何ぞ惣にして繆せん。樞星度を定むること孔に彰にして且つ亶たり。其の四に曰く、十八年を閑すれば行数千里、一氣仡然として未だ曾て委靡せず。老いて益々壯、斃れて後已む。續、世に勒せらる。銘、悪んぞ竢（ま）たん。文政五年壬午 嘉平月（十二月）下浣（下旬）江都 佐藤坦造

根潮尋測量江都府内十四年四月府内畠成 進
呈自寛政庚申至此閑十八年五畿七道遐陬僻壤
無地不涉尽測量而畠記之後復有 命修定寓内
輿地全圖及度數譜行程記至文政元年齡七十又
四疾疾其四月十三日亟殆不起至四年七月輿地
全圖及譜記成 進呈以其九月四日歿 官追
賞其功厚賚孫忠誨以旌之君稟賦朴直精力過絶
於人齡踰七旬鬢霜皤然被肩而其意氣蓬勃如少
壯人每測量 命下輒喜見顔色不日而癸乃躬歷
險阻凌海濤奔走數十百里風雨寒暑未嘗少沮喪
噫嘻何其氣之豪而事之勤也哉所著有國郡晝夜
時刻對數表紀源術并用法求割圓八線法割圓八
線表紀源法地球測遠術問答凡若干卷藏在於家
君先閨長由之女繼配桑原氏皆先焉得三男二女
昆季並殤仲子景敬家督亦蚤世孫忠誨承重墓在
淺草源空寺東岡君之塋側以遺託也君嘗俾忠誨
程余游忠誨才敏箕業行將有望乃者件繋其世系
履歴丐余譲墓門之銘嗚呼余文豈足以不朽君哉
雖然其請惓惓矣不可不徇也乃歴叙之係以銘四
章俾大書而深刻之其一曰叩天之闇極地之輿瘴
烟毒霧不能為瘡祁寒暑雨不能為癪乃如之人罕
見其儔其二曰維昔夏后跡遍四陲泥櫛山楓手胼
足胝八年于外思日致々百世之下維君似之其三
曰樹表立線縱橫步算遠近廣袤靡或毫舛保章分
野何惣而繆樞星定度孔彰且覽其四曰閑十八年
行數千里一氣仡然未嘗委靡老而益壯斃而後已
續勤于世竊西半踰文政五年壬午嘉平月下浣江
都佐藤坦造

資料二 源空寺「東河伊能先生之墓」

『東河伊能君墓銘并叙』原文と読み下し文

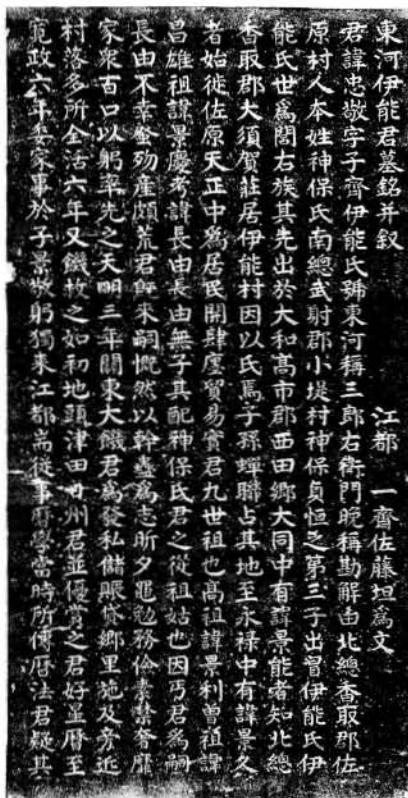
植田浩一

東河伊能先生之墓

江都 一齋佐藤坦爲文

東河伊能君墓銘并叙
君、諱（いみな）は忠敬、字（あざな）は子齊、伊能氏、東河と號し三郎右衛門と稱え、晚（おそ）くには勘解由（かげゆ）と稱す。北總香取郡佐原村の人なり。本姓は神保氏、南總武射（むさ）郡小堤（おんづみ）村の神保貞恒の第三子にして、出でて伊能氏を冒（おか）す。伊能氏は世（よよ）、間（りよ）の右族たり。其の先は大和高市郡西田郷に出づ。大同中、諱、景能なる者あり、北總香取郡大須賀莊を知（おさ）め、伊能村に居し、因つて以て氏とす。

子孫蟬聯（せんれん）、其の地を占む。永祿中に至り、諱、景久なる者有り。始めて佐原に徙（うつ）る。天正中、居民となり、肆塵（してん）を開き、貿易す。實に君が九世の祖なり。高祖は諱、景利、曾祖は諱、昌雄、祖は諱、景慶、考は諱、長由。長由、子無く其の配神保氏は君の從祖姑なり。因つて君に丐（こ）うて、嗣と爲す。長由、不幸にも蚤（つと）に歿（ぼつ）し、産、頗る荒る。君、既に來り、嗣ぐ。慨然として幹蠱（かんこ）を以て志と爲し、昕夕黽勉（きんせきびんべん）、儉素に務め、奢靡（しゃび）を禁ず。家衆百口、躬（み）を以てこれに率先す。天正三年、關東大いに饑う。君、爲に私儲（しちよ）を發し、郷里を賑貸す。施し、旁近の村落に及び、全活する所多し。六年、又、饑う。これを救うこと、初めの如し。地頭津田日州君、並びにこれを優賞す。君、星曆を好み、寛政六年に至り、家事を子景敬に委（ゆだ）ね、躬（み）獨り江都に來り、嵒（はじ）めて曆學に從事す。當時、傳うる所の曆法、君、其の合わざる所有るを疑う。偏（あまね）く、曆家に就き、これを質すも猶（なお）、未（いま）だ釋然とせず。既にして官、會（たまたま）改曆の舉有り。高橋東岡なる者を召し、新たに浪速より来る。君、贊（にえ）を執り、往きて見（まみ）え始めて、西洋の曆法を聞く。理精（くわ）しく、數密（こま）かにして、宿疑乃ち解け、遂に舊學を棄て、これに學ぶ。推步測量の精、東岡の門、



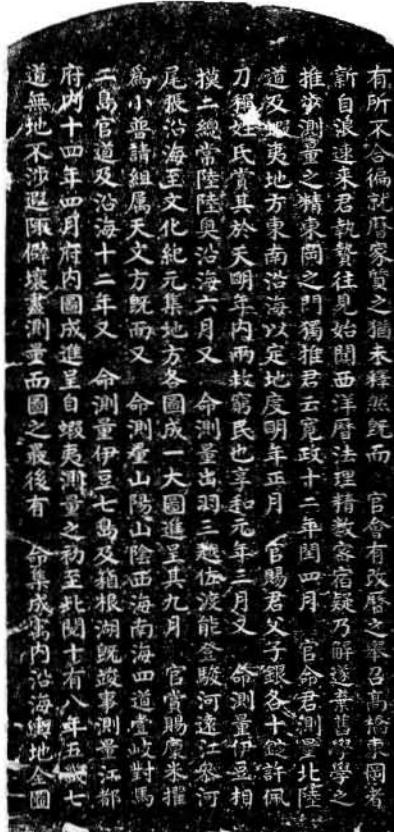
獨り君を推すと云う。寛政十二年閏四月、官、君に北陸道、及び蝦夷地方の東南の沿海を測量し以て地度を定むることを命ず。翌年正月、官、君父子に銀各十錠を賜り刀を佩（お）び姓氏を稱うことを許す。其の天明年内に窮餓を兩救せしを賞してなり。享和元年三月、又、伊豆、相模、二總、常陸、陸奥の沿海を測量することを命ず。六月、又、出羽、三越、佐渡、能登、駿河、遠江、叅河、尾張の沿海を測量することを命ず。文化紀元に至り地方各圖を集め一大圖と成し進呈す。其の九月、官、廩米を賞賜し擢（ぬき）んで小普請組と爲し天文方に属せしむ。既にして又、山陽、山陰、西海、南海の四道と壹岐、對馬の二島の官道、及び沿海を測量することを命ず。文化紀元に至り、齡七十有四、病に罹（かか）り其の四月十三日、劇しくして殆ど起（た）たず。四年七月に至り輿地全圖等成り進呈し、其の九月四日を以て歿す。官、其の功を追賞し廩米宅地を孫忠誨に賜り以てこれを旌せり。君、ひととなり真率にして邊幅を修せず、精力絶人、測量の命下る毎に輒（すなわ）ち喜び顔色に見（あらわ）し、不日にして發す。乃ち躬（みずか）ら險阻を歷（こ）え海濤を凌ぎ奔走すること數百里、風雨寒暑、未だ嘗て少しも沮喪せず。何ぞ其の氣の邁にして事の勤なるや。著す所、國郡晝夜時刻考、對數表紀源術、並びに用法、割圓八線表紀源法、地球測遠術問答凡そ若干卷有り、皆、家に藏す。君、先配長由の女、繼配桑原氏、皆、先に歿す。三男二女を得、昆季並びに殮（しよう）す。仲子景敬嗣ぐも亦先に歿す。孫忠誨嗣ぐ。君の葬は城北淺草源空寺の東岡君の墓域に在り。遺囑に從うなり。忠誨、状を以て來り余に銘を請う。乃ちこれを畧叙し銘と爲す。曰く、源は深く以て遠く、流れは長く以て疏（とお）る。善積の厚き、慶は則ち餘有り。天の闇を叩き、坤の輿を極む。瘴烟毒霧、瘧を爲す能わず、祈寒暑雨、痛を爲す能わず。乃ちかくの如き人、能く有らんか。貞珉（ていみん）泐（ろく）すべきも跡は則ち渝（かわ）らず。

文政五年壬午嘉平月下澣淡海關研書

孝孫忠誨立

廣群鶴鑄

※本稿は会報第四十号 植田浩一氏『忠敬墓碑銘の読み下し文』の内容を再掲したものです。



伊豆新聞伊東 平成26年(2014年)5月18日(日曜日) 朝刊 004ページ

江川家の至宝

重文資料が語る

近代日本の夜明け

39

18088 (文化5) 年閏6月23日付、高橋左近衛門保(江口宣)後期の天文学者書状に「先だつて差し上げた子午線儀(南北の)を計る器具・江川文庫に所藏の図面について図解してある中で不明のところがあり、その部分を朱書きで記載してくださり、その通りと理解した」とあり、別に書き添え、さうに不審なことがあれば質問するよう」と記載して英穀に送っている。残された書状はこれ一通であるが、内容から別紙があり、かなり詳しいやりとりが行われてゐたことがうかがわれる。

周盤、子午線規など、天文に関する器物も多数残されている。これらには使用した、または購入した年号が記されていながら、先進的で高度な趣味を持つ英毅が使用したものと思われる。

日本古来の数学である和算でも長け、余弦(コサイン)・三角関数等計算表なども残る。¹⁰ (文化7年)には独自に「数学金谷編」を作成し、数学問題を英虎英龍兄弟に出題させた。作問は英龍が1、3番、英虎が2、4番目を行っている。英毅は02(亨和)で

英毅は20文政3年には日出人昼夜時刻計算書を手に入れ、24同7年には「測量考」として「月食日時を計算する」原稿を仕上

2) 9月には神社に算額(白分の発見した数学の問題や解法を書いた絵馬を奉納)している。天文学から測量にも興味があり、伊能忠敬との交流もあつた。江川文庫には伊能からの手

紙類は残っていないが、伊能記念館で入手した伊能に宛てた英毅の手紙がある。

査であるが、伊豆の海岸線の内陸部の測量はなかつた。この年の年はちょうど英龍が生まれた年である。第9次測量は伊能、高嶺のため参加せず、永井甚左衛門を隊長として15(文化12)年

元女子の願（国元に残した左近の問題か）が決着したこと、官府の役人で小人目付の小笠原蔵の蚕社の獄に関する誹謗のはねについて調査することを約束している。12月17日付の書状に

英毅は伊能忠敬 間宮林蔵と交流

天文、測量、数学に造詣



英毅が神社に奉納した算額

28日付では、間宮の国
が3通江川家には残っ
ている。そのうち4月

39(天保10年、一卷) 社の獄で洋学者を強制した鳥居耀蔵との確執のなかで英龍は江口濱の測量を行つたが、その援助を、伊能に測量術を学んだ江戸後期の探検家・間宮林藏がした。これは、英毅が文方と交流をつながらりの中でのことであつた。

39
(天保10)年、
一空

山路弥左衛門のところへ行って探して来ない訳にはいかない」という内容である。英毅の付き合いの中から英龍が間宮林蔵を調査依頼を行うことができたとみることができる。（江川文庫嘱託芸文員 橋本敬之）

書状は「英龍から浦賀あたたか
の絵図面の入手を依頼され、す
ぐにお伺いして届けなければなら
ないところ、乍左衛門一件は
よって天文方が取り込み、そ
ため、下絵図ならびに野帳に
いてはことのほかいたがし、

元女子の願（国元に残した家業の問題か）が決着したこと、草府の役人で小人自付の小笠原蔵の墨社の獄に関する誹謗の件について調査をすることを約束している。12月17日付の書状に「先達て作左衛門一件の節に付」とあり、日本地図などをオランダ商館の医師・シーポルトに達したとされるシーポルト事件で高橋作左衛門景保の連座（他に犯罪事件に関係して一緒に処罰を受ける）ことが²⁸（文政11）

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第十八回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

監修 渡辺一郎

編著 井上辰男

【第八次測量】（九州第一次）江戸→鹿児島 自 文化8年11月25日 至 文化9年3月29日

宿泊日・旧暦

(西暦)

宿泊地

現・市町村名

宿泊宅

特記・天体観測

大図番号

1			2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		13		14		15		16		17		18		19		20		21		22		23		24		25		26		27		28		29		30		31		32		33		34		35		36		37		38		39		40		41		42		43		44		45		46		47		48		49		50		51		52		53		54		55		56		57		58		59		60		61		62		63		64		65		66		67		68		69		70		71		72		73		74		75		76		77		78		79		80		81		82		83		84		85		86		87		88		89		90		91		92		93		94		95		96		97		98		99		100		101		102		103		104		105		106		107		108		109		110		111		112		113		114		115		116		117		118		119		120		121		122		123		124		125		126		127		128		129		130		131		132		133		134		135		136		137		138		139		140		141		142		143		144		145		146		147		148		149		150		151		152		153		154		155		156		157		158		159		160		161		162		163		164		165		166		167		168		169		170		171		172		173		174		175		176		177		178		179		180		181		182		183		184		185		186		187		188		189		190		191		192		193		194		195		196		197		198		199		200		201		202		203		204		205		206		207		208		209		210		211		212		213		214		215		216		217		218		219		220		221		222		223		224		225		226		227		228		229		230		231		232		233		234		235		236		237		238		239		240		241		242		243		244		245		246		247		248		249		250		251		252		253		254		255		256		257		258		259		260		261		262		263		264		265		266		267		268		269		270		271		272		273		274		275		276		277		278		279		280		281		282		283		284		285		286		287		288		289		290		291		292		293		294		295		296		297		298		299		300		301		302		303		304		305		306		307		308		309		310		311		312		313		314		315		316		317		318		319		320		321		322		323		324		325		326		327		328		329		330		331		332		333		334		335		336		337		338		339		340		341		342		343		344		345		346		347		348		349		350		351		352		353		354		355		356		357		358		359		360		361		362		363		364		365		366		367		368		369		370		371		372		373		374		375		376		377		378		379		380		381		382		383		384		385		386		387		388		389		390		391		392		393		394		395		396		397		398		399		400		401		402		403		404		405		406		407		408		409		410		411		412		413		414		415		416		417		418		419		420		421		422		423		424		425		426		427		428		429		430		431		432		433		434		435		436		437		438		439		440		441		442		443		444		445		446		447		448		449		450		451		452		453		454		455		456		457		458		459		460		461		462		463		464		465		466		467		468		469		470		471		472		473		474		475		476		477		478		479		480		481		482		483		484		485		486		487		488		489		490		491		492		493		494		495		496		497		498		499		500		501		502		503		504		505		506		507		508		509		510		511		512		513		514		515		516		517		518		519		520		521		522		523		524		525		526		527		528		529		530		531		532		533		534		535		536		537		538		539		540		541		542		543		544		545		546		547		548		549		550		551		552		553		554		555		556		557		558		559		560		561		562		563		564		565		566		567		568		569		570		571		572		573		574		575		576		577		578		579		580		581		582		583		584		585		586		587		588		589		590		591		592		593		594		595		596		597		598		599		600		601		602		603		604		605		606		607		608		609		610		611		612		613		614		615		616		617		618		619		620		621		622		623		624		625		626		627		628		629		630		631		632		633		634		635		636		637		638		639		640		641		642		643		644		645		646		647		648		649		650		651		652		653		654		655		656		657		658		659		660		661		662		663		664		665		666		667		668		669		670		671		672		673		674		675		676		677		678		679		680		681		682		683		684		685		686		687		688		689		690		691		692		693		694		695		696		697		698		699		700		701		702		703		704		705		706		707		708		709		710		711		712		713		714		715		716		717		718		719		720		721		722		723		724		725		726		727		728		729		730		731		732		733		734		735		736		737		738		739		740		741		742		743		744		745		746		747		748		749		750		751		752		753		754		755		756		757		758		759		760		761		762		763		764		765		766		767		768		769		770		771		772		773		774		775		776		777		778		779		780		781		782		783		784		785		786		787		788		789		790		791		792		793		794		795		796		797		798		799		800		801		802		803		804		805		806		807		808		809		810		811		812		813		814		815		816		817		818		819		820		821		822		823		824		825		826		827		828		829		830		831		832		833		834		835		836		837		838		839		840		841		842		843		844		845		846		847		848		849		850		851		852		853		854		855		856		857		858		859		860		861		862		863		864		865		866		867		868		869		870		871		872		873		874		875		876		877		878		879		880		881		882		883		884		885		886		887		888		889		890		891		892		893		894		895		896		897		898		899		900		901		902		903		904		905		906		907		908		909		910		911		912		913		914		915		916		917		918		919		920		921		922		923		924		925		926		927		928		929		930		931		932		933		934		935		936		937		938		939		940		941		942		943		944		945		946		947		948		949		950		951		952		953		954		955		956		957		9	

9 *				8 *			7 *			6		5		4		3		2 *		宿泊日・旧暦
支隊	支隊昼夜	支隊	支隊昼夜	支隊	支隊昼夜	支隊	支隊昼夜	支隊	支隊昼夜	支隊	支隊昼夜	支隊	支隊昼夜	支隊	支隊昼夜	支隊	支隊昼夜	(西暦)		
上黒駒宿	上黒駒村字新宿	石和駅	勝沼駅	藤野木村	中初狩宿	大月駅	川口村	船津村	上谷村	小沼村	上吉田村	同	(19)	(18)	(17)	(16)	竹ノ下村	矢倉沢村		
同 笛吹市	同 笛吹市	同 甲州市	同 笛吹市	同 大月市	同 大月市	同 富士河口湖町	同 富士河口湖町	同 富士河口湖町	同 都留市	同 西桂町	山梨県富士吉田市	同	同 小山町	同 静岡県小山町	同 小田原市	同 南足柄市	現・市町村名			
七郎兵衛	庄右衛門	本陣彦治右衛門	本陣太兵衛	名主十左衛門	本陣藤右衛門	本陣太兵衛	社家中村備後	与五太夫	名主源兵衛	名主市右衛門	御師田辺越後	同	大猿屋米山久太夫	百姓平兵衛	名主九郎左衛門	名主与右衛門	宿泊宅			
黒駒村境迄測る。上黒駒村字新宿より上黒駒村下	藤野木村より上黒駒御番所を歴て字新宿迄測る。	無測。	無測。	川口村より御坂峠を歴て藤野木村迄測る。	無測。恒星測定	上谷村より大月駅に繋ぐ。	船津村より川口村迄測る。	船津村より上谷村迄測る。恒星測定	小沼村より上谷村迄測る。恒星測定	上吉田村より小沼川口追分を歴て船津村迄測る。	甲州街道追分より小沼村迄測る。恒星測定	雨天逗留、仕越を測る。須走村より国界竪坂峠迄測る。	竪坂峠より山中村を歴て上吉田村迄測る。恒星測定	北久原村より須走村迄測るが、この辺宝永年中富士山焼に田畠悉く亡地となる。恒星測定、富士山高さも測る	竹ノ下村より御殿場村を歴て北原より無側。	矢倉沢村より御関所、足柄峠を越し竹ノ下村迄測る。先手小田井細田村より繋ぐ。	和田河原村追分より井細田村迄測る。	関本村最乗寺街道碑より最乗寺迄測る。関本村止宿前より矢倉沢村迄測る。恒星測定	特記・天体観測	
九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	九七	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	九九	九九	九九番号		

15*		14		13		12		11*		10			
支隊		（28）		（27）		（26）		（25）		（24）			
内房村字落合		完子原宿		万沢宿		福士村		横根村		身延山			
同 富士宮市	静岡県静岡市清水区	同 南部町	同 南部町	同 南部町	同 南部町	同 身延町	山梨県身延町	同 市川三郷町	同 市川三郷町	同 市川大門村	同 大田和村		
名 主要蔵	本陣源左衛門	本 陣 直 吉	權 兵 衛	長 百姓 源 藏	本 陣 近 藤 東 左 衛 門	名 主 惣 右 衛 門	名 主 喜 十 郎	名 主 清 水 政 五 郎	身 延 山 坊 中 大 林 坊	市 右 衛 門	名 主 四 郎 左 衛 門		
橋迄測る。 島より富士川向長貫村へかかる網	万沢宿より万沢村興津岩淵道追分を歴て内房村字落合迄測る。字落合より富士川を一度渡り瀬戸を渡り完子原宿を歴て富士見峠迄測る。	万沢村興津岩淵道追分より境川	万沢宿より万沢宿本陣迄測る。	万沢宿より大和峠を歴て福士村迄測る。	南部宿より大和峠を歴て福士村迄測定。	中野村より南部宿下町迄測る。	横根村より中野村迄測る。	身延山門前より柏木峠を歴て横根村迄測る。	市川より富士川乗船、波木井村へ着。それより身延山へ行く。恒星測定。	市川大門村より高田村迄測る。	大田和村より笛吹川渡り上野村富士大宮道追分を歴て芦川を渡り市川大門村五丁目迄測る。恒星測定。	布施村追分四辻より大田和村迄測る。	無測。
一〇〇	一〇七	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	九八	九八	九八	九七

11		10		9		8		7		6		5		4		3		2		1		文化9年1月		宿泊日・旧暦			
（-23）		中食		中食		中食		中食		中食		中食		中食		中食		中食		（-1812）		（西暦）					
矢掛駅	川辺駅	板倉宿	岡山城下下ノ町	一日市駅	伊部村	三ツ石駅	原村片嶋駅	姫路城下福中町	加古川駅寺家町	西谷新村	明石大倉谷宿	舞子浜	兵庫津旅籠町	二ツ茶屋村	（-14）	中食	（-13）	郡山宿	大阪府茨木市	大阪府茨木市	（-1812）	（西暦）	宿泊地	現・市町村名	和中散大角弥右衛門	宿泊宅	
同 矢掛町	同 倉敷市	（-22）	中食	（-21）	中食	（-20）	昼休	（-19）	正条駅	姫路市	明石市	同 神戸市垂水区	同 神戸市兵庫区	同 神戸市中央区	同 西宮市	兵庫県伊丹市	兵庫県伊丹市	同 西宮市	兵庫県伊丹市	（-15）	中食	（-16）	中食	（-17）	中食	（-18）	中食
平田屋淹三郎	松田屋淹三郎	本陣難波惣七	本陣東方平四郎	福岡屋吉郎兵衛	難波三郎太夫	木村長十郎	本陣鈴木又太郎	本陣井口市兵衛	本陣山本半右衛門	井上庄兵衛	脇本陣京塙長兵衛	市右衛門	本陣広瀬治兵衛	亀屋嘉右衛門	木屋藤左衛門分家	木屋新兵衛	本陣衣笠又兵衛	脇本陣小畠源兵衛	本陣吉左衛門	仁右衛門	脇本陣又兵衛	仁右衛門	本陣肥前屋吉兵衛	本陣田中九兵衛	無測。	無測。	
無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	無測。	
一五一	一五一	一五一	一五一	一四五	一四五	一四五	一四五	一四五	一四五	一四五	一三七	一三七	一三七	一三七	一三七	一三七	一三七	一三七	一三七	一三七	一三三	一三三	一三三	一三三	一三三	大図番号	

3			2		1	文化9年2月	宿泊日・旧暦			(西暦)		
(一 15)	先手 昼休	後手 手中食	(一 14)	先手 手中食	後手 手中食	(3. 13)	(1812)	中食	(一 8)	中食	宿泊地	
内野宿	長尾村	飯塚宿	字堀川口枝小竹	鶴田村字尾勝	木屋瀬駅	福岡県 北九州市八幡西区	(一 12)	中食	(一 8)	小倉城下	赤間関	
同 飯塚市	同 飯塚市	同 飯塚市	同 小竹町	同 宮若市	同 北九州市八幡西区	同 北九州市八幡西区	(一 11)	同	(一 9)	同	同 下関市	
小倉屋佐助 本陣大庭長兵衛 薩摩屋宅治	源一郎 本陣善兵衛 小四郎 善右衛門	中野屋弥助	本陣善兵衛 小四郎 善右衛門	又五郎	本陣甚平 長崎屋弥平治	本陣甚平 長崎屋弥平治	藤太郎 銀杏屋定市	本陣清治郎 藤野屋与助	名主与市	宮崎良介	現・市町村名 新屋治郎兵衛 宿泊宅	
寿命村新茶屋より内野川を渡り 長尾村を歴て内野宿まで測る。	秋月追分を歴て寿命村新茶屋まで測る。	飯塚川板橋より瀬戸村字瀬戸鼻	欄干に繋ぐ。恒星測定	飯塚宿止宿まで測り、飯塚川板橋	勝野村字鶴池より枝小竹を歴て を過ぎ鶴田村字尾勝を歴て勝野 村字鶴池まで測る。	赤間追分より直方川を渡り直方 を過ぎ黒崎駅田町迄測る。	小嶺村より香月村字上石坂を歴 て石坂川を渡り木屋瀬駅止宿前	小倉城下室町制札より荒生田村 を歴て黒崎駅田町迄測る。	雨天逗留	雨天逗留。	赤間関より乗船三里。旧冬二十 日認めの御用状届く 恒星測定	無測。 二日認めの御用状届く 恒星測定
一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	一八六	一八六	一八六	一八六	一七八	大図番号 一七八	

8 *			7			6			5			4			宿泊日・旧暦
支隊	(20)	後手中食	(19)	先手小休	後手中食	(18)	後手中食	(17)	後手中食	(16)	先手昼休	(西暦)	宿泊地		
原町宿	瀬高町	尾嶋村	羽犬塚宿	一条村枝盛徳村	府中町(久留米)	古賀茶屋	松崎宿	千鶴村	山家宿	山家村枝浦ノ下	同	現・市町村名	宿泊地	上西山字茶屋原より枝浦ノ下を	
同 みやま市	同 みやま市	同 筑後市	同 筑後市	同 筑後市	同 久留米市	同 久留米市	同 小郡市	同 小郡市	同 筑紫野市	同 筑紫野市	同	現・市町村名	宿泊地	まで測る。恒星測定	
一向宗松林山西乗寺 松屋喜兵衛	本陣竹次郎 喜三右衛門	庄屋与三郎	本陣中尾屋利兵衛 大津屋佐兵衛 山口屋利右衛門	塩屋治兵衛	造酒屋喜多屋文藏	本陣万屋佐七 小松屋清藏 福島屋常八	助藏	本陣新八 甚兵衛 源作	庄屋伝五郎	久留米屋平右衛門 山田茂右衛門 久留米屋平右衛門	又五郎	肥前筑後追分より長崎街道福岡 街道碑に繋ぎ、中牟田村枝石櫃 日田街道追分を歴て西小田村福 岡領、乙隈村久留米領国界まで	宿泊宅	特記・天体観測	
久留米領今寺村より瀬高町を経て瀬高川を渡り、三池街道追分を測り、無測にて瀬高町に至る。下庄町村三池街道追分より長嶋村古賀村界まで測る。江戸用状届く。恒星測定	羽犬塚駅より尾嶋村を経て久留米領今寺村柳川領本郷村界まで測り、無測にて瀬高町に至る。下庄町村三池街道追分より長嶋村古賀村界まで測る。江戸用状届く。恒星測定	藤田村字相川より盛徳村を経て羽犬塚駅まで測る。	久留米街道四辻より矢取町柳川街道追分を歴て藤田浦村藤田村垂宮本社前まで測る。	筑後川測遠術にて測り府中町豊後街道追分に繋ぎ止宿前を過ぎ	松崎駅より古賀茶屋久留米追分を歴て神代村字渡筑後川渡場まで測る。	肥前筑後追分より長崎街道福岡街道碑に繋ぎ、中牟田村枝石櫃日田街道追分を歴て西小田村福岡領、乙隈村久留米領国界まで	上西山字茶屋原より枝浦ノ下を								
一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八八	一八七	一八七	一八七	一八七	一八七	大図番号		

												宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号	
17	16	15	14	13*	12	11	10	9											
(29) 中食	(28) 昼休	(27)	(26)	支隊	(25)	(24)	(23)	後手昼休	(22)	後手昼休	府本村	瀬戸坂字湯屋	本隊小休	岩津村枝高木	楠田村枝渡瀬	本隊小休	岩津村枝高木	古賀村より岩津村枝高木、北新瀬を経て白金川を渡り三池町柳開村柳川街道追分、楠田村枝渡瀬領御料所界まで測る。	一九三
松橋町 宇土町	熊本城下 新町二丁目	熊本城下入口 本坪井町三丁目	大津宿	限府町	上御宇村枝新町	同	湯ノ町	植木町	木葉村	高瀬町下町	府本村	瀬戸坂字湯屋	支隊中食	楠田村枝渡瀬	本隊小休	岩津村枝高木	古賀村より岩津村枝高木、北新瀬を経て白金川を渡り三池町柳開村柳川街道追分、楠田村枝渡瀬領御料所界まで測る。	一九三	
同 宇城市 宇土市	同 熊本市中央区	同 熊本市中央区	同 大津町	同 菊池市	同 山鹿市	同	山鹿市	同 植木町	同 玉東町	同 玉名市	熊本県荒尾市	同 大牟田市	同 みやま市	同 みやま市	同 みやま市	同 みやま市	同 みやま市	宗平	
弥治郎 茂治郎	客屋判屋善十郎	客館	油屋治右衛門	大庄屋支配 甲斐半兵衛	中小姓格岡山権内	島田平左衛門	同 客館	客館 亭主分彦四郎	徳永多賀久	問屋甚三郎	利兵衛	本陣別当 内田忠右衛門 甚左衛門 三郎吉	酒屋文右衛門	東派一向宗福正寺	酒屋文右衛門	東派一向宗福正寺	酒屋文右衛門	宗平	
無測。 恒星測定	無測。 恒星測定	無測。 忠敬村井純寿へ立寄 熊本侯より一同に贈物あり	無測。 忠敬村井純寿へ立寄 熊本侯より一同に贈物あり	限府町より菊池川仮橋を渡り、合 志川を渡り正觀寺村枝限府町、外 称菊池迄測る。本隊は無測。恒星 測定	支隊は上御宇村枝新町より追間 川を渡り正觀寺村枝限府町、外 称菊池迄測る。本隊は無測。恒星 測定	湯ノ町より上御宇村枝新町迄測 る。湯ノ町逗留	雨天逗留	無測。	高瀬町土橋際より午年測量所に 繋ぎ高瀬川を測遠術により測り 渡る。木葉村を経て田原坂を越し 植木町止宿前迄測る。恒星測定	高瀬町下町まで測る。熊本侯より料 理、酒、国産品々一同に被贈下。	三池新町より筑後肥後国界を経 て、井土川を渡り府本村を経て高 瀬町下町まで測る。熊本侯より料 理、酒、国産品々一同に被贈下。	原町宿出口より瀬戸坂字湯屋を 経て筑後肥後国界、柳川熊本領 界碑、肥後南関入口まで測り、無 測にて三池町へ来着。柳川侯より 贈物あり。恒星測定	原町宿出口より瀬戸坂字湯屋を 経て筑後肥後国界、柳川熊本領 界碑、肥後南関入口まで測り、無 測にて三池町へ来着。柳川侯より 贈物あり。恒星測定	酒屋文右衛門	酒屋文右衛門	酒屋文右衛門	酒屋文右衛門	酒屋文右衛門	一九三
一九五	一九五	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三		

宿泊日・旧暦			(西暦)			宿泊地			現・市町村名			宿泊宅			特記・天体観測						
27	*	26	*	25	*	24	*	23	*	22	*	21	*	20	*	19		18			
(8)	昼休	小休	(7)	(6)	(5)	(4)	(3)					(4.1)	昼休	(3.1)	先手小休	先手小休	後手中食	後手中食			
南権原村 (大口駅)	小木原村	山野村字中	目丸村字小河内	同	久木野村	湯浦本村枝古田	湯浦本村	佐敷町	小田浦	二見村枝若松	豊原村枝平山	豊原村	日奈久町	八代	八代	岡中村	宮原町	小川町			
同 大口市	同 大口市	同 大口市	鹿児島県大口市	同	水俣市	芦北町	芦北町	同 芦北町	同 芦北町	同 芦北町	熊本県八代市	同 八代市	同 八代市	同 八代市	同 八代市	同 永川町	同 宇城市	宿泊宅			
百姓政吉 喜八	百姓治兵衛	郷士斎藤治兵衛	番所宅	同	大庄屋伊藤勝太郎	庄屋孫吉	大庄屋伊藤丑助	本陣三輪屋定吉	阿蘇宮	百姓清七	役人段上野太郎介	仮亭、主田浦熊之助	宮地村より萩原村を経て球磨川を渡り、豊原村、奈良木村、枝平山を経て日奈久町迄測る。	日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝大平迄測る。	田浦村浜村町より小田浦字下小敷町止宿前迄測る。恒星測定	高田手永大庄屋 小田藤衛門	宮山和三郎 種山手永大庄屋 遠山嘉左衛門	中小姓格辻寿一郎	碑方吉兵衛	松橋亀屋町より小川町を経て益城郡八代郡界字小川土橋中心迄測る。	
恒星測定	字小河内より山野村、小木原村を歴て南権原村字大口駅まで測。え字小河内まで測。久木野村より肥後・薩摩国界を越	測定	打続雨天、道路悪に付逗留。恒星	枝古田より久木野村迄測る。	枝古田より久木野村迄測る。	枝古田より久木野村迄測る。	佐敷村字井上、薩摩街道人吉街道追分碑より水俣大口追分を経て湯浦本村を過ぎ枝大河内川端迄測る。	田浦村浜村町より小田浦字下小敷町止宿前迄測る。恒星測定	日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝大平迄測る。	田浦村浜村町より小田浦字下小敷町止宿前迄測る。恒星測定	日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝大平迄測る。	日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝大平迄測る。	日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝大平迄測る。	日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝大平迄測る。	日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝大平迄測る。	日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝大平迄測る。	日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝大平迄測る。	日奈久町より二見村枝若松を経て二見村枝大平迄測る。	一九五	一九五	一九五
二〇八	二〇八	二〇八	二〇八		二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇			

2月20日										支隊】	3月1日 *			3月30 *			宿泊日・旧暦 (西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測		
26	25	24	23	22	21	4.1	14	13	12		11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1		
(7)	(6)	(5)	中食	(4)	(3)	(2)	佐敷町	鹿児島県芦北町	鹿児島島城下 下町呉服町	脇元村	段土村(加治木)	同	霧島市	同	霧島市	同	霧島市	同	霧島市	小休	中食	前目村	宿泊地
阿久根町	野田村	鯖淵村米ノ津浦	鯖淵村切通	袋村	陣内村新町	津奈木村	佐敷町	鹿児島県芦北町	鹿児島島城下 下町呉服町	脇元村	段土村(加治木)	同	霧島市	同	霧島市	同	霧島市	同	霧島市	百姓喜左衛門	百姓喜左衛門	前目村	宿泊地
同 阿久根市	同 出水市	同 出水市	同 出水市	同 水俣市	同 水俣市	同 水俣市	三輪屋定吉	三輪屋定吉	同 鹿児島島城下 下町呉服町	始良町	加治木町	同	霧島市	同	霧島市	同	霧島市	同	霧島市	百姓喜左衛門	百姓喜左衛門	前目村	宿泊地
町人川南源兵衛 人手洗作左衛門	町人川南源兵衛 吉満善助	善六 喜左衛門	野間ヶ原番所 郷士吉富龜治郎	郷士堺田喜兵衛	牧幸右衛門	城山伝之丞	水俣吉左衛門	庄屋伊藤喜仙太	庄屋伊藤喜仙太	百姓与市 会所家主七左衛門	瀬尾矢兵衛 有馬七兵衛	銀四郎 喜三治	百姓松右衛門	百姓源兵衛	百姓源兵衛	百姓源兵衛	百姓源兵衛	百姓源兵衛	百姓源兵衛	只右衛門 長助	只右衛門 長助	前目村	宿泊地
野田村より阿久根町まで測。	野田村より阿久根町まで測。	米ノ津浦町より肥後・薩摩国界を歴て鯖淵村米ノ津浦まで測。	米ノ津浦町より肥後・薩摩国界を歴て鯖淵村米ノ津浦まで測。	袋村より肥後・薩摩国界を歴て袋村まで測。	袋村より肥後・薩摩国界を歴て袋村まで測。	陣内村石橋より陣坂峠を歴て石橋まで測。	陣内村石橋より陣坂峠を歴て石橋まで測。	字上原より陣内村新町を歴て石橋まで測。	字上原より陣内村新町を歴て石橋まで測。	越、田ノ浦村まで測。 湯ノ浦本村より津奈木太郎峠を越、津奈木村字上原まで測。	越、田ノ浦村まで測。 湯ノ浦本村より津奈木太郎峠を越、津奈木村字上原まで測。	二見村字大平より赤松太郎峠を越、田ノ浦村まで測。	段土村より加久藤街道に繋、網懸橋、木田村上別府川(測遠)、脇元村綿瀬川を渡り字浦町四辻を歴て白金峠(大隅・薩摩国界)まで測。	段土村より加久藤街道に繋、網懸橋、木田村上別府川(測遠)、脇元村綿瀬川を渡り字浦町四辻を歴て白金峠(大隅・薩摩国界)まで測。	無測。恒星測定	定川まで測。江戸用状届く。恒星測定	湯尾村より川内川上流土橋を渡り南浦村、高田村を歴て中ノ村入川まで測。江戸用状届く。恒星測定	雨天逗留。	南権原村より目丸村字大口を歴て薩摩・大隅国界を越、前目村を歴て湯尾村まで測。	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八
二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇九	二〇九	二〇九	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	大図番号	

										宿泊日・旧暦	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
1/2	1/1	1/10	9	8	7	6	5	4	文化9年3月 (1812)	本隊	2/7	中食	阿久根村字大川	同	阿久根市	二〇八
(2/3)	(2/2)	(2/21)	(2/20)	(2/19)	(2/18)	(2/17)	(2/16)	(2/15)	鹿児島城下 下町吳服町	2/29	(2/8)	麦浦村西方	同	薩摩川内市	二〇八	
同	同	鹿児島湊	同	同	同	同	同	鹿児島城下 下町吳服町	3/1日	(2/9)	麦浦村字松平	同	薩摩川内市	庄八孫太郎	二〇八	
同	同	鹿児島市	同	同	同	同	同	鹿児島県鹿児島市	3/2	(2/10)	大小路町	同	薩摩川内市	松太郎	二〇八	
同	同	船中泊	同	同	同	同	同	会所	3/3	(2/11)	串木野村 字芹ヶ野	同	薩摩川内市	名主勇右衛門	二〇八	
雨天船逗留。	雨天船逗留。	鹿児島城下乗船。山川湊へ行と す。南風、船中逗留。船数八艘、 三艘御用方乗船並荷物積船共、 五艘屋久島種子島測量差添役並 人歩、総勢九十三名	屋久島行荷物積立	下町吳服町より中町網屋町四辻へ 繋、琉球舎前新橋より柳町城下 野村迄測。恒星測定	出口木戸を歴て太鼓橋を渡り吉 野村迄測。恒星測定	逗留。恒星測定	逗留。恒星測定	逗留。	久八十右衛門	百姓幸左衛門 武平治	大小路村川内川前より川内川(測 遠術)を渡り東手村、西手村を歴 て串木野村芹ヶ野まで測る。	雨天逗留。大小路町より新田八 幡宮迄測。	麦浦村西方より下之村滝川土橋 を渡り大小路町川内川前まで測。	麦浦村西方より阿久根川板橋を渡 り麦浦村西方まで測。	阿久根町より阿久根川板橋を渡 り麦浦村西方まで測。	
								二〇九	会所	無測量。	串木野村芹ヶ野より湊村湊町止 宿まで繋測。	二二〇	二二〇	二二〇八	二二〇八	
								二〇九	二二〇九	二二〇九	二二〇九	二二〇八	二二〇八	二二〇八	二二〇八	

忠敬が宿とした盛田久左衛門家

柏木 隆雄

常滑と聞いたとき、濃褐色の急須を想い浮べた。常滑は焼物の町という印象を持つ。

夏のある日、忠敬の史跡を追つて愛知県知多半島の常滑市を訪ねた。



盛田本家

忠敬の東海地方の測量は第四次。享和三年（一八〇三）二月、測量隊は江戸を発つて東海道を西へ向つた。豊橋から渥美半島に入り、伊良湖岬まで行つてまた豊橋に戻り、知多半島には蒲郡を経て、いまの地名では、刈谷、半田、武豊と進み、四月二九日に常滑（小鈴ヶ谷村）

に着いた。
測量日記の部分

四月二九日朝晴天。六ツ半後東端村出立、（此日午中より暑強し。慶助病氣快方にて出勤す）

——略——

岡を通れば小鈴ヶ谷前に広目村あり。郡蔵、大兄、良助等は九ツ後、我等慶助、秀蔵はハツ頃に小鈴ヶ谷村に着。（止宿酒造人にて盛田久左衛門）此夜曇天不測。

——略——

盛田家は代々、小鈴ヶ谷村の庄屋をつとめ、酒、味噌、醤油を商いとする醸造家で、忠敬は日記に、盛田久左衛門は酒造人なりと記していることは、佐原の三郎右衛門家と同業だったことに親しみを覚えたにちがいない。

盛田家は代々の当主が久左衛門の名跡を継いでいる。尾張藩の記録によると、寛文五年（一六六五）には酒造りをしていたよう、伊能測量隊の宿泊当時は、第九代久左衛門命親が当主であった。庄屋として小鈴ヶ谷村の諸行事に関与し、天保の飢きんの時には村民救済に私財を提供、また海岸道路の整備、築堤などにも多大な貢献をしていた。歴史の中で特記されているのは、第十一代当主の命祺が、明治政府の教育方針を理解し、私塾の鈴渓義塾を創設し多くの優秀な人材を世に出したこと。トヨタ自動車社長の石田退三もその一人。時を経て昭和期、戦後まもなく第十五代当主となつたのが、ソニーの創業者、盛田昭夫であった。

現在の盛田家の右奥に醸造工場、左隣に白壁土蔵造りの鈴渓資料館。ここには盛田昭夫が、

鈴渓学術財団を設立し、学術研究のための資料を収集し整理した盛田家の古文書類も保管さ



鈴渓資料館

れている。私も案内され中に入つたが、三層の棚に箱入れされた厖大な資料に圧倒された。忠敬宿泊時の記録があるかと興味を抱いたが個々に調べる時間もなく、財団が編集刊行した盛田家文書目録上下二巻（合わせて四七〇ページ）を拝領し後日の精査とした。

文書目録には、法令、村役、治安、災害、貢租、諸役などの項目があり、法令の項には御触書留、願書留、高札などがあり、暦年順に表題、年月日が記されている。

その一例、「御公儀御触状留」宝永二年九月朔日。

測量日記には盛田家宿泊の前日に「小鈴ヶ谷村迄、泊触れを出す」と記されているが、しか

催のコンサートでエヴェレスト最高齢登頂の三浦雄一郎氏とお目にかかる際、私の名刺に日本地図が刷りこんであつたことから、三浦氏には伊能忠敬と少々関りがあることを話すと、三浦氏は忠敬の生涯に深く興味を持ち尊敬する人の一人であると仰言つた。これがご縁となってこの五月に、神田駿河台の文化サロンで、エヴェレスト登頂写真展の開催となつた。その時の司会の中で私が三浦氏との出会いのいきさつを話すと、終演後、来場者の女性が「私の実家に伊能忠敬が泊つた」と話されたので「え、ご実家は何処ですか」と尋ねると、「愛知県の常滑です」驚いたことに、その女性は岡田直子さん、あのソニーの創業者、盛田昭夫のご長女であった。忠敬とソニーの盛田さん、この巡

盛田家訪問の機会を得たのは、伊能忠敬の導きに依る、と書くと、なぜ
いうことになるので、いきさつを説明しておこう。

し残念なことに伊能測量隊に関するものは文書の中からは何も見つけられなかつた。ただ不審に思つたことは、寛政、享和の古文書が、法令以外の行事、村役、冠婚葬祭等の項を追つても極端に少なかつた。この期の一畠包分の資料が紛失したのかとの疑念を抱いた。



盛田家文書目録

常滑市の観光名所の「味の館」も盛田株式会社の経営で、道の駅のようなレストランを兼ねた盛田家醸造品の販売所。おいしい味噌田楽とおそばをご馳走になった。この味の館に付属して盛田昭夫アーカイブ写真展が開催されてい



「盛田昭夫写真展」入口にて
筆者（左）と岡田直子さん（右）

り合せに胸が躍つた。帰宅後、さつそく測量日記で検証しそれが事実であることを確認した。その後、岡田さんから、お調べになることがあれば、常滑の本家と鈴渓資料館をご案内下さることのありがたいお便りをいただき、七月十三日、岡田さんの常滑行のご予定に合わせて盛田家訪問となつたのである。岡田さんは東京世田谷にお住いであるが常滑の盛田家に係りのある事業にも関係し、また盛田昭夫アーカイブ写真展のプロデュースもなさつてゐる。月に一度は東京と常滑を往来しておられた。

た。“ソニーの盛田”“世界の盛田”が躍動する資料がセンスよく展示されていた。

盛田家を訪ねた日はお盆の入り、第十六代当主の盛田英夫氏も在宅されていて、忠敬が寝食をしたかも知れない客間で、同席させていた菩提寺のご住職と共に、しばし忠敬談議となつた。

田直子さんに心から感謝の気持を申し上げ、盛田本家訪問記を了とする。



盛田家第16代当主英夫氏（後列右）と
岡田直子さん（前列右）

〈參考資料〉

測量日記

佐久間達夫 編著
の史跡をたどる
井上辰男 編著

測量日記にみる一日の測量（八王子）

菱山 剛秀

伊能忠敬の測量日記によれば、文化六年の秋に江戸を出発し、二年越し九州の第一次測量の帰路、伊能忠敬の測量隊は、現在の岡崎市から長野県の伊那市に抜け、甲州街道に出て、測量をしながら江戸に向かった。文化八年（1811）四月二十三日に甲府に着き、同五月四日に相模と武藏の国境の小仏峠を越えて、小仏駅に着いた。

そして、五月五日、伊能忠敬の測量隊は、本体が甲州街道を小仏駅から八王子宿まで測量し、支隊は高尾山を測量し八王子宿の東よりにあつた横山宿の名主川口七郎兵衛宅に宿泊している。

測量は早朝から始められ、昼にはこの日の宿泊地に着いている。



小仏の関所跡

江戸に向かう甲州街道の西の入口に当たり、重要な関所であり、千人同心が守っていた。



測量日記の高尾山細道と思われる尾根道

地元の住民が使っている形跡はあるが、ほとんど知られていない山道である。

高尾山へは小仏関所の西側の新井村から登つているが、現在はこの付近に登山道は存在しない。しかし、同時代に描かれた武藏名所図絵の小仏関所の絵には関所の西側から高尾山の登山道が描かれているから、当時は甲州街道から高尾山に詣でる人の登山口があつたのであろう。

旧暦の五月五日は、現在の六月二十四日にあたり、夏至の時期で日は長いが梅雨の季節でもある。一旦宿に着いた一行は、雨が近づいているのを察してか宿泊場所からさらに先の宿場の出口まで測量している。やがて雨も降りだしたようだが、測量日記にはその後の行動の記載がない。

おそらく明るいうちにこの日の測量結果を下図に整理するとともに、宿の主から地名や知行所などの情報を聞くなど、測量地の情報を収集・整理していたと思われる。この夜は雨だったので外の観測はできなかつたが、晴れていれば夜も天体観測をしていたはずである。



甲州街道に設置された道標
甲州街道と裏街道のあんげ道（陣馬街道）の追分にあり、「左甲州道中高尾山道」と彫られている。

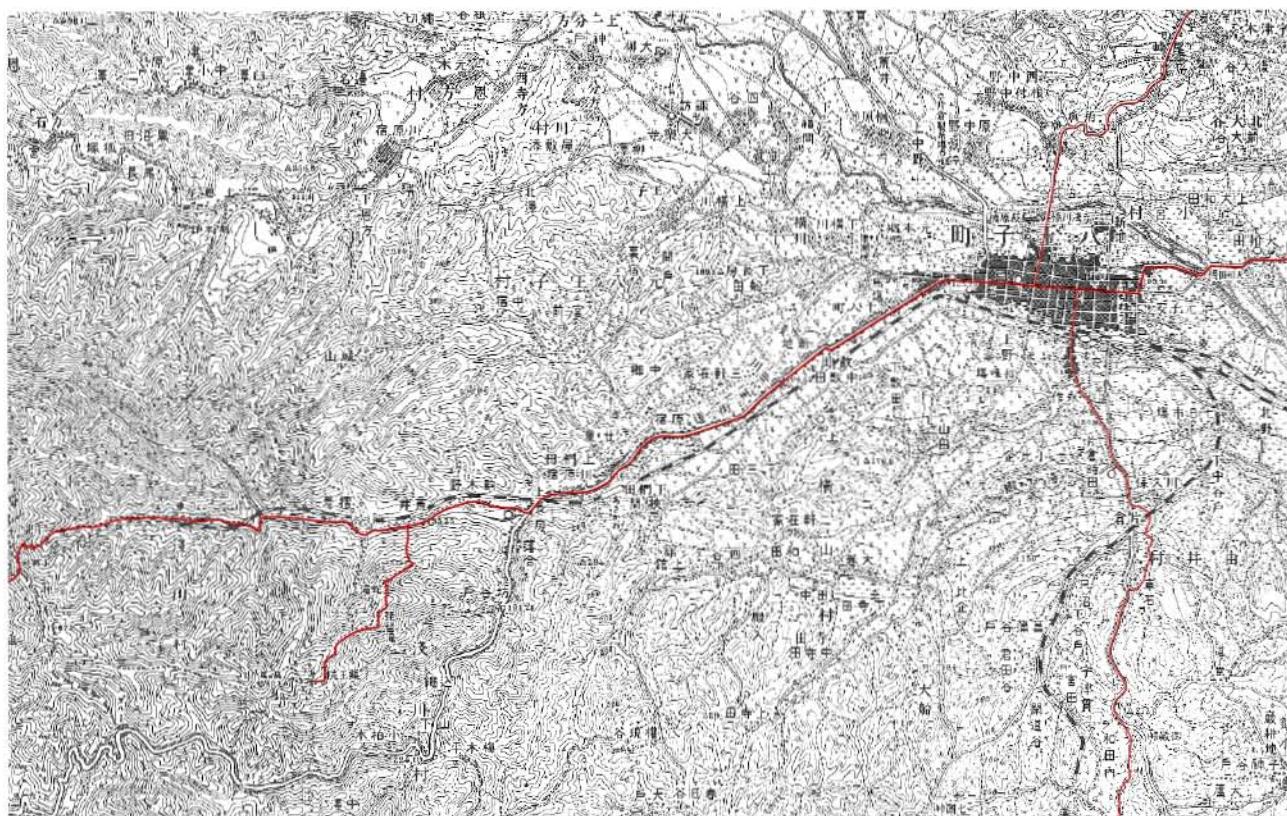


今も残る旧甲州街道（上柄田村原宿）

旧街道沿いには古い家並が残り、道の脇の水路には今も豊かな水が流れている。



国立国会図書館蔵 伊能大図第 90 号 (八王子部分)



5万分の1地形図「青梅、八王子、五日市、上野原」 (明治39年~42年 陸地測量部)

伊能忠敬測量日記 文化八年五月五日（西暦一八一一年六月二十五日）

文化八年五月五日（西曆一八一一年六月二十五日）

口語訳

同五日曇天 先後手六ツ後 小佛駅出立 後手我等 下河邊 青木 永井 長蔵
武州多摩郡 伊奈助右衛門 御代官所 上長房村同小佛宿方初 制札迄
高尾山細道 上長房村内 駒木野 宇新井 印迄測 高尾山追分圖 一丁二十七間 字摺差

文化八年（1811）五月五日（新暦六月二十五日）、天気は曇り、先発は六ツ（朝五時）過ぎに宿泊地の小仏駅を出発した。後発の私たち（下河辺、青木、永井、長藏）は、伊奈助右衛門御代官所である武州多摩郡上長房村の中の小仏の宿泊地から始め制札までは一町二十七間（160m）、字摺差、高尾山細道、上長房村内駒木野、字新井、高尾山追分を通過し、駒木野駅制札まで測量した。ここまで距離は二十四町一十七間（267 km）である。途中高尾山追分地点に測線の接続点として高の印を残して来た。

伊奈 御代官所	制札迄
	△二十四丁二十七間
上門田村字河原宿	甲 五丁五十四間 御關所
字原宿	御關所
字新地	曰小松 御關所
	字小名次村 高尾山追分
	田安殿領 長次直治郎知行
	散田村
八王子十五組内	本郷宿 千人町 八木宿 八番宿

八日市場 日光街道
追分 橫山宿 相州
川越 追分制札前 甲一里廿七丁
○八間四尺 制札占本陣迄百〇五間
廿二間二〇メ外

横山宿八日市場宿
一ヶ月代二駅
外二仕越
新町迄
三十〇間
甲八丁
合二里廿五丁
三十二間四尺
先手
坂部

梁田 上田 箱田 平助 小佛駅方無測二テ上櫛田村へ行 高尾山を測

高尾山百喜寺藥王院
御朱印七十五石

飯綱大權現 本地不動明王 末社六ヶ所 唐銅 五重塔
元龜元年北条氏康建立 中興破却江戸赤坂某再建

坊中十八院 山中二淨土院阿里 余八山下二在 境内大木多し佛法僧ト云島

右寺ノ中門方測初
高印迄測繫
二十二丁
二十の間二尺
後手八
九ツ前

先手八 九ツ後 八王子 横山宿に着 止宿本陣 川口七郎兵衛 脇鯛屋勘治

八ツ半此方雨 深更方大雨朝二至ル

お知らせ

忠敬没後二百年記念行事の進捗について

渡辺 一郎

標記のうち、伊能測量への地元協力者の顕彰、スマートと Google マップ、伊能忠敬の史料館を結んで運用するデジタルスタンプラリーの企画が固まりましたので、進捗の概要を紹介します。

伊能測量地元協力者顕彰会

協力者子孫約百名（同伴者約三〇名を含む）の参加があり、3分の2が遠路からの御参加です。驚いておられます。これに加えて、来賓、会員、一般の参加は八十数名で満席となりました。ほかに寄付のみ参加された会員は約三〇名おられます。顕彰会は確実に成功すると思われます。

デジタルスタンプラリー
アイホンの審査に、意外に時間がかかりましたが、OKが出ましたので、十一月一日から運用開始の予定です。十一月十四時に記者発表しますので、スマホをご利用の方はアプリをダウンロードしてお試し下さい。

日程などの記述のあと、当家には前もって訪問したいと連絡があったので、待っていたところ家来一人をつれて山駕籠でお出でになつたので、後に六代当主となる富長が出迎え、座敷に通し御挨拶申し上げたところ、気安くお話をされた。

お茶、餅菓子を出し、初めての訪問では酒は飲まないとのことであつたが、お酒とお吸い物、肴を差し上げた。そのあと自分の身元、測量のはじめた経緯、前川家の名前を聞いているので立ち寄つたこと、などを話し、江戸に来られたときは富岡八幡宮の近くで天文隠居といえば、誰でも知っているから寄つて欲しいといつて分かれたという。あと大沢峠（四十八坂）へ弁当を差し上げたら丁寧な御礼を述べてよこされたといふ。

前川家側には「不時臨時公私諸用留」という記録があります。史料吟味をしたわけではないですが、訟文が大槌町教委から刊行されており、これにより要点を対比してみます。

前川家側には「不時臨時公私諸用留」という記録があります。史料吟味をしたわけではないですが、訟文が大槌町教委から刊行されており、これにより要点を対比してみます。

伊能測量協力者の子孫探しのかでこんな資料にお目にかかつたのを紹介します。

三陸の吉里吉里村の話しだすが、測量日記では次のとおりです。

九月二十八日 朝六ツ半頃大槌町四日町出立。同八日町、大槌村、

それより吉里吉里村（前川善兵衛なるものあり。富家にて世に知る所なり。尤も旧家とて三四代以来は南部家中となり。富は古に遙に劣れりといふ。立ち寄りて一覧す）

似たような話は他でもあつたようにおもう。天文隠居といつて訪ねて欲しいという文言を記憶している。この状況をどう考えたらよいであろうか。忠敬が関心を持つて訪問したことはあきらかである。地元案内人（案内しろ）といふのは幕府代官経由で出された勘定奉行からの指令であつた）を通じてご都合よければ訪問したいと申し入れさせたのである。

たが、お酒とお吸い物、肴を差し上げた。そのあと自分の身元、測量のはじまつた経緯、前川家の名前を聞いているので立ち寄つたこと、などを話し、江戸に来られたときは富岡八幡宮の近くで天文隠居といえば、誰でも知っているから寄つて欲しいといつて分かれたという。あと大沢峠（四十八坂）へ弁当を差し上げたら丁寧な御礼を述べてよこされたといふ。

誰でも知っているから寄つて欲しいといつて分かれたという。あと大沢峠（四十八坂）へ弁当を差し上げたら丁寧な御礼を述べてよこされたといふ。

応募の中にはいろいろあって、考え込むようなものもあるが、多くの応募をいただいたことに感謝しています。

併せて、会員各位から予想を超える資金協力をいただいたことに厚く御礼を申し上げます。



忠敬没後 200 年記念行事の進行について

2017 年 11 月 1 日 伊能忠敬研究会
イノペディアをつくる会

来年は伊能忠敬没後 200 年にあたります。当会などが企画している記念行事の一部が確定しましたので発表いたします。

1. 伊能忠敬の全宿泊地をめぐるデジタルスタンプラリー 運用開始

- 1) 昨年 12 月 26 日に新聞発表した伊能測量隊の全宿泊地をめぐるデジタルスタンプラリー ソフトがアップルの承認を得ましたので運用を開始します。
- 2) 開始期日 2017 年 11 月 1 日 12:00 です。
- 3) スマートフォン（以下スマホ）アプリは、アップルストア（iOS 端末）、PLAY ストア（アンドロイド端末）から無料でインストールできます。
- 4) 伊能忠敬 e 史料館のデータベースと連動し、全国 3,000 点以上の伊能隊宿泊地点を検索、500 メートル以内に接近すれば、移動手段に関係なくスタンプをゲット可能。ゲットしたスタンプは自身のスマホで管理できますが、e 史料館でも管理でき、スマホを変更した場合もスタンプの復元ができます。
- 5) 県別測量回数別の探訪計画も可能。目標達成すれば達成証が表示でき、スタンプ帳も作成可能です
- 6) 説明資料
以下の「伊能忠敬 e 史料館」URL で説明しています。
<https://www.inopedia.tokyo/deGo/>



【要約】

全国の伊能測量隊が宿泊した地点に行き、スマホでスタンプするスタンプラリー。会員登録を行うと e 史料館と連携して、スタンプ帳、達成証等が作られる。他の会員の足跡を集計できランキング等を見ることも可能。

伊能で Go iOS 版 解説書(pdf)

<http://www.inopedia.tokyo/deGo/dwLoad/inoDeGoiOS.pdf>

伊能で Go アンドロイド版 解説書(pdf)

<http://www.inopedia.tokyo/deGo/dwLoad/inoDeGoiOS.pdf>

「伊能で Go My ページ 解説書」(pdf)

<https://www.inopedia.tokyo/deGo/dwLoad/MyPage.pdf>

YouTube 「伊能で Go」 紹介 Movie

<https://www.youtube.com/watch?v=JQTtkUA04mA>

2. 200 年前の伊能測量に協力した地元有志の顕彰事業は着々と進行中

- 1) 2016 年 3 月に新聞発表した伊能測量協力者顕彰大会には、協力者子孫 100 名以上の参加確定
- 2) 参加子孫の 2/3 は関東地方以遠 期日は 2018 年 4 月 21 日 (土) 14:00 より
- 3) 伊能忠敬研究会員も 80 名が参加、資金を拠出して子孫を招待、会員代表より顕彰の辞を表明
- 4) 国土地理院長など関係団体からも御挨拶をいただく
- 5) 伊能忠敬研究会と伊能家当主が連名して 200 年前の御先祖に対し感謝状を謹呈
- 6) アトラクションとして立川志の輔の落語を上演
- 7) 翌日は都内の史跡案内、測量出発地富岡八幡宮に参拝、忠敬の墓碑のある源空寺で、200 年記念法要など

参考 御先祖に対する感謝状雛形を発表 個々の協力者ごとに事績を明記

以上

第50回「地図展」



講演をする西川治さん

昭和42年に第1回の地図展が開催され、毎年東京又は政令市や県庁所在都市で開催されてきた「地図展」が今年で50回を迎えた。地図展には当研究会も後援をしており、昨年の福島では伊能図の展示と鈴木代表の講演も行われた。記念すべき50回目の今年は、これまでの開催地とは異なり、東京郊外の多摩市で行われた。

会場の「パルテノン多摩」は多摩ニュータウンの中心に位置し、住民と近くの大学の学生で賑わっており、今年は11月9日(土)に、当研究会の会員である西川治さんによる「世界地図の改良史における日本列島—コロンブスから伊能忠敬まで」と題する講演が行われた。

新入会員自己紹介

高知県

福田 まさし

埼玉県 井上 健



私の母方の先祖は土佐・大津村(現土佐清水市大津)の庄屋でした。



今年4月まで会員だった母井上靖子(6代目伊能康之助長女)を引き継いで会員にさせて頂く長男の井上健でございます。戦後まもなく佐原で生を受けており、伊能忠敬生誕後201年目という年回りでもあります。

忠敬さん一行が土佐を測量したこととは知識としては知っていますが、われわれのご先祖が宿を提供していましたとは…。

調べてみれば大津村の庄屋「上岡弁之丞」宅は忠敬さんご一行の「本陣」となり、夜は天測により緯度が計算されています。忠敬さん自身がそれを記録に残してくれており、子孫として感激もひとしおです。

高校時代は登山部に所属し、地図を読むのが大好きでした。大学時代は、山野で読図能力と走力を競う「オリエンテーリング」というマイナーなスポーツに夢中でした。46歳を迎えた「中高年の星」忠敬さんの生きざまに多くの学ぶことができそうです。よろしくお願ひいたします。

その他、以下の2名の方が入会されました。

千葉県 菅原佐知子さん
福岡県 小坪 隆さん

埼玉県 井上 健

今年4月まで会員だった母井上靖子(6代目伊能康之助長女)を引き継いで会員にさせて頂く長男の井上健でございます。戦後まもなく佐原で生を受けており、伊能忠敬生誕後201年目という年回りでもあります。

多くの人の支援を得ながら、日本地図作成という生涯事業を成し遂げた生き方、業績に対し、少しでも理解を深めるように努めたいと思っております。何卒宜しくお願ひ申上げます。

忠敬さん一行が土佐を測量したこととは知識としては知っていますが、われわれのご先祖が宿を提供していましたとは…。

調べてみれば大津村の庄屋「上岡弁之丞」宅は忠敬さんご一行の「本陣」となり、夜は天測により緯度が計算されています。忠敬さん自身がそれを記録に残してくれており、子孫として感激もひとしおです。

高校時代は登山部に所属し、地図を読むのが大好きでした。大学時代は、山野で読図能力と走力を競う「オリエンテーリング」というマイナーなスポーツに夢中でした。46歳を迎えた「中高年の星」忠敬さんの生きざまに多くの学ぶことができそうです。よろしくお願ひいたします。

退会者

原田 野崎 村上

昭三さん

千葉県 菅原佐知子さん
福岡県 小坪 隆さん

埼玉県 井上 健

福岡県 照男さん、井田 福次郎さん、
信行さん、芳賀 啓さん、

『伊能忠敬研究』投稿要領

① 原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。
*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字（704字×三段または480字×四段）です。

② 原稿のかたち

・本文（テキスト） 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。
・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350ppi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。
*印刷サイズが100mm×75mmで350ppiのカラー写真的場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによつて5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真是無理な場合があります。
わからぬ場合はL判（127mm×89mm）程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキャナで撮った電子ファイル（JPEG形式またはTIFF形式）にしてください。

③ 原稿の送り方
左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものをお送りください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷上り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。（詳しくは本誌六七号および六八号を参照）

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org
・郵送の場合 <http://www.ttm.or.jp/~kokko> 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階
伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④ 注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。
おいてください。
・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取つてください。
引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。
・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があつた場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。
・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとつておいてください。

伊能忠敬研究会御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行つております。

- ① 会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ② 例会・見学会の開催
- ③ 忠敬関連イベントの主催または共催
- ④ その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地
〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール mail@inoh-ken.org
郵便振替口座 001H0-6-071-8610

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬e資料館 「Innopedia（イノペディア）」伊能忠敬と伊能図の大事典

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料

<http://www.inopedia.tokyo/>
<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料
<http://www.ttm.or.jp/~kokko>

編集後記

◇まずは発行が一月遅れてしまったことをお詫びする。◇予定の期日に原稿が集まらず、それでも何とか割り付け作業はしてみたが、そのまま発行するには躊躇せざるを得なかつた。◇前号の編集担当も原稿の集まり具合と、原稿の内容には苦労したようだ。◇期限を守つて発行するか、遅れても原稿の内容を精査して発行するか悩んだが、印刷物は後に残る。研究会の性格を考えると、遅れる方を選んだ。◇その結果、投稿いただいた方には申し訳ないが、何篇かの原稿が掲載できなくなつた。◇今後もこのような状況は続く可能性が高い。◇編集に当たつては、理事の皆さんにも査読いただき、ご意見を伺いながら進めて行くことにしているが、それには時間と原稿の完成度が高いことが必須である。◇次号に向けて投稿要領に従い、早めの原稿提出をお願いする。（T・H）